
目が覚めたら東方世界にいた

マチュピチュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目が覚めたら東方世界にいた

【Nコード】

N8321W

【作者名】

マチユピチュ

【あらすじ】

主人公が目を覚ますとそこはるか上空。とりあえず人のいるところに行こうと神社に降り立ったら落ちてきた東風谷早苗さん。そこから主人公はどう生き残っていくのか 注意、この話は一応前作『目が覚めたらシンジになってた』の続編です。ちよっと前作も読んでいたほうがいいかもよ

1・まずは守矢神社に行きましょう（前書き）

ノープラン小説ほど辛いものはない。憑依は何故かなかったことになった！

続かなくなったらごめんよ！前作の『目が覚めたらシンジになってた』の読者様。

ご愛読ありがとうございます！

1・まずは守矢神社に行きましょう

「あれ…ここって……」

俺が目が覚めたら……

「なんで俺は上空を飛んでいるんだ？」

俺が目が覚めた場所は何の変哲もないただの上空。
服装もジーンズに黒い服と、目覚めるにはラフすぎる服だ。

「まあ……なんで俺は浮遊しているのか詳しく問おう」

びゅーっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ

「空よ、何か答えたまえ」

「あややや……こんなところに外の人間がいるとは……」

「あややや……こんなところに天狗さんがいるとは……」

「あやややや……」

「あやややや……」

あやややややや……まさか俺が幻想入りするとは……
しかも空を飛べるとは……

「と言っわけさ」

「どういっわけですか」

ふっふっふ…何故かボロボロの射命丸、貴様には分らんか。
この俺の高ぶりを…高ぶる…あふれる…

「つまり俺は最強オリキャラとなることが出来たのだよ！！ふうは
はははは！！！！

わが世の春ですよおおおおおおおおおおおおおおおお
お！！！！！！」

背中からちようちよを出して俺はどこか宛のないたびへ出かけた。
え？さっきの射命丸？分子レベルで分解されてたような…

と言うわけで降り立った場所は守矢神社（暫定）
大きな鳥居が神社の門前にあって、そこには小さな建物、

その本堂つばい場所には賽銭箱が用意されている。
……多分守矢神社だろう。

とりあえず神社に入ったら手を洗って…水を飲んで…吐き出すんだっけ？飲んじやったよ。

まあいいか。とりあえずお参りお参り。上で何故か爆音みたいな音が聞こえるけどまあいい。

上を見上げると何故か光の玉が見えるがおまいりが先決だ。

「あ…でも賽銭ないな…」

まあなしでもバチは当たらないだろう。

とりあえず1例して鐘を鳴らして手をパンパンと叩く。

「えーっと…これから健康で学業に専念できますよう」そこ！
！危ないわよ！！」「へ？」

突然上から声をかけられて上を向く。

そこにはとんでもないスピードで降下して来る緑の頭…

それをひらりとかわした。

「いったあゝ……」

高高度から降下して来た少女……と呼ぶべきなのかこれは。
まあそれはいいでしょう。それは何事もなかったように頭を抑えながら起き上がった。

復活の呪文でも使ったのかと言っくらい早く起き上がる。
バケモノかコイツ。

「……………えーつと……参拝者ですか？」

「実を言つとそうなのである」

「あの……今の状況理解していますか？」

「お恥ずかしい事この上ない。だが理解できる事はある」
「？」

困惑する記憶の中、これだけは理解できると保障できる。

「俺は誰だ？」

「全然理解してないじゃないですか！！」

「いや待て、ただ一つ理解できる事はある。俺は大学生、童貞だ」

「何故そこを言うんですか！？」

「そこを言わずしてどこを言っ」

そう、俺は名前、住所、電話番号を全く覚えていないのだ。
後ろの2つは別に問題ない。だが名前が分からないのは致命的だ。
どうする、どうすんの？どうすんのよ俺！！

「とりあえずここに居ても危険ですから神社に避難してください！」

「それはありがたい」

ボロボロの早苗さんに手を引かれて神社の中に入った。
ちなみに上空では蛙が巨大な蛇を出しながら巫女と戦っていた。
何故危機感がないかって？それはな…禁則事項です♪

「俺はやっぱり東方の世界に来てたのか…」

早苗さんが着替えるから俺は別室に案内された。

と言う事は殺気分子レベルで分解されたのは本物の射命丸。
そして俺はリアルに空を飛んでいたのか。

まあそれはどうでもいい。

今の状況だ。恐らく今俺がいる状況は風神録の時代だ。

そんなところで俺は参拝してたのか。俺すげえ。

まあそれもどうでもいい。

それにしても俺は何故空を飛んでいたのか。

と言うか俺は一体誰なんだ。いや、中二病とかそういうのじゃない。

俺はリアルに誰なんだ？自分が大学生である事とある程度の外の知識。

それくらいしか頭に残ってない。何か大切なものを消されたような気がする。

なぜか頭の片隅に渚カヲルが笑っているのが映るのも気になる。

「まあそれも別に気にする事ではない」

じゃあ今からどうしましょ。

恐らく上空にいる霊夢さんが勝ったら俺はどこに行けばいい？
まあそれも追々考えるところ…

「…………あれ？」

もう考えることねえよ……

1・まずは守矢神社に行きましょう（後書き）

こぼれ話

レミリア「あなたは今までに食べたパンの数を覚えているの？」
大学生「13960枚辺りだったような気がする」

2・誰かと意気投合しましょう、宿無しは詰みです。（前書き）

マインスーパータら大体2手目でドカーンしてしまう。何でだ？

2・誰かと意気投合しよう、宿無しは詰みです。

しかしこの腹立つくらいに晴れ渡ったこの空。

その平和の空に何故こんな光の玉が飛んでいるのか。
というか何故早苗さんは喧嘩を売ったんだろうか。

「……………まあ別に俺には関係ないか。いきなり戦えて引きずり出されるわけでもないし」

縁側に出て諏訪子（暫定）と霊夢（暫定）をの戦いを見物することにした。

双方とんでもない量の光の玉を出しながら必死こいて戦っている。石でも投げ込んだらどうなるんだろうか。

…いや、確かスペルカードは遊びみたいなものだったな。他者の遊びに横槍は危険だ。

俺だって学習するときはする。

「まあ別に俺に被害がなければどこで何をしててもかまわんよ」

「気楽なんですね……」

「ん？早苗さん？」

何時の間にやら俺の隣に新しい巫女服姿の早苗さんが座っていた。
……今までにこんな瞬間をあこがれなかった人間はいるだろうか。

「そういえばどうして私の名を？」

「あれだ、情報屋ではないが一般人レベルの情報は得ているつもりだ」

「へえ、外の世界の情報屋……」

「ではないことは確かだ」

「じゃあ誰なんですか？」

「俺の名は大学生とでも呼んでくれ」

「大学生ですか（なんという精神年齢の低さ…）」

オイ早苗。今日をそらしたな？大学生と聞いて目をそらしたな貴様。

弾幕しようぜ…久々にキレちまったよ…と言いたところだが弾幕など撃つ能力があるなら是非頂きたいものだ。

故に俺は諏訪子と霊夢の戦闘をひとしきり見た。結局霊夢が勝った。

「ん？」

何か落ちてきてる。何かこっち来てる。

だが避けられないわけではない。

「ほっ」

「ふべっ！！？」

俺の能力はひらりとかわす程度の能力…ではなからうな。

「……!!」
「……」

向こうで説教されている早苗さんファミリーを横目に俺は再び茶をすすする。

説教の内容は…まあ簡単に言えば二度と悪さするなよ。である。それをやたらと噛み砕いて説教するものだから長引くのである。

「……あれ？俺空気がじゃね？」

今気付いた、俺完全に空気だ。
だからと言ってここで帰るわけにはいかんだろうに。

仕方ない。少しまとう。

「分かった？幻想郷にもルールってもんがあるの」
「はい……」

「じゃあこの話は終わりね……で？そこで寂しそうにお茶をすす
てる人は誰？」

霊夢が指差す方向には、目を細くして和んだ顔をしながら茶をす
する青年が居た。

少なくとも霊夢よりかは年上の青年である。

「彼ですか？参拝客の『大学生』と言う方です」

「あー…確か私が落ちてきたのを見事にかわした少年」

「誰だ…？」

4人がまじまじと大学生を見つめていると彼はそれに気付いたよ
うだ。

慣れない様子で空中に滞空しながら近づいてきた。

「なんだね諸君」

ふわりふわりと練習もかねて浮遊しながら近寄る。
その様子に早苗さんが笑顔で迎え入れてくれた。

「改めてようこそ、守矢神社へ。参拝にこられたんですね？」
「んゝまあそんな感じかな？何せ目が覚めたらいきなり空中に居たもんだら」

とりあえず今までの経緯を簡単に説明した。

「なるほど、ところでその大学生とやら、私の名を知っているな？」

「えっと…ああ、八坂神奈子伍長！」

「何だその微妙な階級は…」

紫色の髪に240mmキャノン砲、間違いない。ガンキャノンだ
(ゲンドウ風)

「確かあなたは軍神でしたね？いや、軍神じゃないとそんな口調じゃないだろ」

「いかにも、私は軍神として知られている」

「ふむ…（まじまじ）…」

「な…何を見ている」

ふむ…このスタイル、この性格、このオーラ…軍神って事は事実のようだ。

と言う事は…

「神奈子さんって狙撃兵？それとも突撃兵？ふむ…工兵もありえる

な…だが衛生兵はありえん。

いや…豪快さから感じ取るにヘリガンナーかな？」

「私は今で言う衛生兵のような存在だったな」

「へえ…以外ですね！どんな功績を？」

「知りたいか！最初はそうだな」

「」「」………「」「」

次の日、昨日俺は神奈子さんと意気投合して酒をのみ合う仲となつた。

で、早苗さんと諏訪子さんも快く俺を受け入れてくれる事となつたのである。

「大学生さん！おはようございます」

朝、俺は少し早めに起きると、外で早苗さんが神社の掃除をしていた。

「おゝ元気そうだねえ…俺は二日酔いで死にそうだったのに…」

「未成年なのに飲むから悪いんですよ」

「うつせ、それでも今年の冬に20になるんだよバーカバーカ…う
えっ…気持ち悪い…」

「今の台詞アスカイメージしてませんでした？」

「何故ばれたし」

聞いたところ何故か早苗さん、第3新東京市に行ったそうなの。

バカじゃないのか？何が量産型が股間蹴られてただよ。寝言は寝
て言え。

「で？分社は取れなかったんだろ？どうするのよ」

「そうですね…今日は歓迎の宴会をやるそうですから…大人しくし
ましょう。大学生さんは？」

「俺？俺はだな……食って寝る！」

「太りますよ」

大丈夫、3桁行かなかったらまだ大丈夫だ。

ちなみに健康チェックでは若干太り気味らしい。おー怖い怖い。

「冗談だ。とりあえず弾幕が出せるように訓練するよ。」

日ごろの練習でゴッドフィンガーは体得したが…流石にそれだけ
じゃどうにもならないだろうに」

「どこことなくシンジさんに似てますね…大学生さんって」

「お前の中のシンジはどんなシンジなんだ？何か心配になってきた
ぞ…」

2・誰かと意気投合しよう、宿無しは詰みです。（後書き）

こぼれ話

大学生「1ね」

諏訪子「2」

神奈子「3だ」

早苗「よ…4」「ダウトオオ!!」「」「ひい!？」

大学生「チツ…ミスったか……5」

諏訪子「6!」

神奈子「7」

早苗「は…」「ダウトオオオオオ!!」「」「ひゃあ!？」

3・慣れてきたらなれてきたで色々苦労するものです(前書き)

と言う題名だが苦労の要素などない。

3・慣れてきたらなれてきたで色々苦勞するものです

「…ふむ…」

弾幕訓練が思つうように行かないから上空を飛びながら思考する。
まあ弾幕の事なの二次ですつとこの世界觀の事について考えて
ただけなんだが。

「風神録は終了…事実上紅魔郷異変はもう終わったのかな…永琳の
暴走も終わり…」

恐らく次は博麗神社の局地的大地震、使徒（天子）襲来。
いや…その前に霊夢と魔理沙とレミリアと咲夜さんが月に行く
んだっけ？

「…月か…俺も行きたいな…あ、でも酸素ないからいけないか」
でも行きたいな…月面探査機でもいけない場所なんだろう？
めっちゃ行きてえ。テンション上がったきた。

「ま、戦闘力がないと行けるものも行けないな、どこかで戦闘術で
も教わるか」

すい…と妖怪の山を降りた。

「ふう、身近に戦闘術を教えてくれる人なんているのかね…」

とりあえず俺は博麗神社に向けて飛ぶ。

困ったときは情報屋の霊夢さんだ！

それ以外誰も信用ならんって分けではないが、何分交友度が少ないものでして。

「お？あれか……随分と寂れた神社」

それなりの鳥居にそれなりの建物、それなりの賽銭箱。

で、その付近で皿やらなんやらを並べて洗っている巫女。

「普通ああいうのって巫女がやるものなのかね…確か今日は宴会とかどうとか…」

まあ幻想郷に来て2日目だ。交友が少なくても仕方ない。
とりあえず手伝ってやるに限るかな。

と言うわけで博麗神社に降り立った。意外にも整備されている。

「おっす霊夢さん。1日ぶり」

「あーアンタね。素敵な賽銭箱はあっちよ」

「誰かは分かるかな？」

「大学生でしょ」

ふむ、記憶力はそれなりにあるようだ。
だがこれは分かるかな？

「お前は昨日食べた飯の種類を覚えているか？」

「昨日食べてないけど」

「予想の斜め上の答えが出てきた」

「もういい？これから忙しくなるから帰って」

「はい、帰らせていただきます」

この人はだめだ、俺は帰る。

「こ……この国はあんな奴が守ってて大丈夫なのか……」

これはまずい……実にまずい……幻想郷の平和の鍵が死んだらえらいことになるってのに

全くその平和に感謝してない。ってか異変解決してるんだったら少しは稼ぎはあるだろ…

ま…まあ気を取り直して、どこかに行くべきところはないのか…
人里での戦闘は禁止、魔法の森は瘴気が怖い。
紅魔館はどこにあるのか分からない。

「だが…ここであんなにしている訳にはいかん…とりあえず戦闘術を覚えるのだ」

『私のお寶銭箱があああああああああ…！！！！！！？？？』

「ん？どうしたどうした」

博麗神社で異常発生？一体なにがあつた？
と言うかどんだけ響くんだ霊夢の声

まあとりあえず行つて見よう。

「どうしましたか霊夢さああ「月光蝶である！！」ああ（ジュッ」

また何かが黒歴史の被害にあつたような気がする…まあ気のせいだ。

「ないい…ない…ないない…」

突然の賽銭箱の消失、それは神社にとって死活問題でもある。ふらりふらりと鳥居にもたれて力尽きてしまった。

このような姿はドライな霊夢にしては珍しい事態だ。

「こんなに探してもないなんて……」

と言うかそんなに馬鹿でかい賽銭箱が見当たらないなど、盗まれた以外に考えられないのだろうか。

こう見えて意外にも霊夢と言う存在、バカなのかもしれない。

「もしかして「賽銭箱がない？盗まれたんじゃない？」そうそう…盗まれたんじゃないか…ってね」

「なら犯人を殴り殺すしかないか…」

「殴り殺すどころか恨み殺してやるわよ……ん？」

「おっす」

「…うえ！？大学生！？帰ったんじゃないの!？」

「馬鹿でかい声を聞いて飛んできたのさ」

で、その声を聞きつけてやってきたのがこの俺、大学生だ。

ニタニタしながら霊夢の後ろに立ってたのがビビられたのか思い切り霊夢がのけぞった。

結構面白い。

「話は聞かせてもらった」

霊夢の前に立って人差し指を額に当てる。

「お前さん……もしや盗難事件なんじゃないですか？」

「な…」

「そもそも盗難というものは相手の見ていない隙を見て物を盗む。

これは当然ですね…？」

どこからともなく取り出したペンとメモをトントンとして霊夢に説明する。

「え…ええ」

「つまり、です。このような開放的な空間、つまり公共の場であるこの神社で盗難。

それも獣道を通らないといけないと言う非常にずさんな設計の「ずさんは余計よ」神社。

…盗みやすい環境ではありませんか？セキリユティを強化していますか？」

俺のセキリユティという言葉に聞き覚えがないように耳をかしげる。

「と言うわけで、俺もその犯人探し、手伝おうではないか！」
「はつきり言っとあんたじゃ役不足よ。帰りなさい」

o r z

「さなええ…霊夢に虐められた…」

「大学生が女子高生に泣きついてどうするんですか！…！」

ぐしゅ…しやなえ…

「で…？弾幕は撃てるようになったんですか？」

「弾幕…弾幕？そうか弾幕か！！弾幕だったんだな！！」

俺は生気が戻ったように立ち上がり、神奈子さんを連れてくる。

「な…なんだ？」

迷惑そうに外に出た神奈子さん。まあ振り払う様な素振りを見せない限り拒否はしていない。

なら多少無理を頼んでも大丈夫だろう。

「神奈子さん！僕と夜の組み手をしてください（ピチューン…冗談です。組み手して」

「組み手だと？冗談はやめておくといい」

軽くあしらうように帰ろうとする神奈子さん。それを引き止めて精一杯の威圧を込めて言う。

「俺は本気ですけど何か…？真面目にしてくれないとホワイトグリント作りませんよ？」

「う…（なんとという殺意…いや…妖気…？）…いいだろう…ならば組み手だ」

「よろしい、ならば戦争だ」

ぶっつけ本番だけど大丈夫かな…

3・慣れてきたらなれてきたで色々苦労するものです（後書き）

こぼれ話

マチュ「ちゃんとプランを練っているかって？ 結末すら考えてなかったんだ」

シンジ「まあドンマイ！」

マチュ「いずれこの小説も最期の時を迎えるのだな……」

4・弾幕程度は撃てるようにしましょう(前書き)

適当に結末を今考えているところです。

それまで文体が安定しないかもしれませんがご了承ください承あれ。

4・弾幕程度は撃てるようにしましょう

実を言うと自分も勝てるかどうかは分らん。実質勝てないんじゃないね？

とか思うがそれを感じ付かれたら勝負など受けてくれるはずがない。大体勝てる勝負など昔からないのだ。だから当たって砕けろ、と言うことわざも出来る。

故に今回俺は神奈子さんと組み手をやるに当たって不安な事が多々存在する。

勝てねえだろ…これ…

「月光蝶はほぼ発動しないに等しい、ゴッドフィンガーは当たる気配なし…」

この状況…まさしく鬼畜！！
ほんでもって今すぐ断りたい。謝りたい。
だがこっちから頼んだマッチメイク、ここで断ったら男として廃るだろう。

しかし神奈子さんのこの威圧感、本気だ^{マジ}

「準備はいいな」

「お…おう！人間の熱き魂フィールド！略してATフィールドをとくと御覧なさいな！」

やばいっす…この感じ今までにない感じです。

この状況…別府でうちわパクッて親に説教喰らう直前の空気と同じだ。

いや、下手したらそれ以上の修羅場。神奈子さんマジお母さん。

半ばヤケクソでファインティングポーズを取り、神奈子さんに合図する。

「ほう…中々見込みのある男だ。いざ！」

「尋常じゃないくらい」

「勝負！！……って何故逃げる！！」

妖怪の山

さあ始まりましたオンバシラファイト。

まず逃げている俺の周りに半端じゃない数の御柱が設置される。

「お前の言う熱き魂…持ってそうには見えないが見せてもらおう」
「失敬な！俺にだってプライドの一つや二つくらいはある！！」

「とてもそうには見えないが…」

「ならば見せてやろう！！いや！見せれたらいいな！！」

と、自分でも驚くくらいのスピードで神奈子さんの間合いを詰め、ブレーキがきかずタックルをする形となった。

「うつつ右京サンフランシスコアタアアック！！！！？」

右京サンフランシスコアタック、

つまりサンフランシスコ並みのスピードでタックルをすることだ。え？分からない？辞書で調べなさい。

で、それをいとも簡単に避けられた俺はフェアウェイキープできず草むらにOBとなった。

「神奈子貴様ああ！！！！ドライバーは飛距離が高いから注意しろと何度言ったら！！」

「……（真面目に組み手をする気があるのか……）」

オイなんだそのあきれ返った顔は…

「俺にだって意地がある！それを思い知らされるまで…神奈子！！」

「！！」

「俺に攻撃するな」

「その意気や良し！！………へ？いや断る！！」

守矢神社

「神奈子…大丈夫かな…イライラの拳句殺してないかな…」
「大学生さん……馬鹿な事してませんかね……」

大学生の事をまだ知りきっていない早苗と諏訪子。しかしこれだけは分かる。

『あれは馬鹿だ』と言う事。しかし馬鹿だからこそ放っておけないのは、

彼女らのやさしさと呼べるべきものであるのか、ただ単に惨めに思っているだけなのか。

その辺は全て謎。居候を始めて2日目の人物は馬鹿なのかどうかも定かではない。

「お？動きがあつたみたいだね」

「喰らいやがれ！！局地戦用マスタースパーク！！」

木の間から出て、細いレーザーを撃つ。

すると着弾地点から反射するように太いレーザーが出現した。
ちなみに当然のように撃っているが即興で弾幕を撃ってたぞ。
こっちはハンデで背負ってたよ。なめんなよボケ。

「小癪な！エクспанデッド・オンバシラ！！」

夜

「…中々やるじゃないか大学生」

「それほどでもないっすよw」

「外の人間が私と対等に戦えるとは知らなかったぞ」

諏訪子さんに救出された俺は現在神奈子さんと一緒に治療を受けている

俺の怪我は背骨のひび、肋骨、腕、足の裏など。計12箇所。
まあ1日寝たら大体治るだろう。

対する神奈子さんはかすり傷による怪我のみだ。
後勘違いして股間攻撃した時に出来たのけしからん所へのアザ。
こればかりは土下座したら許してもらえた。

「しかし…開幕早々攻撃するなどは…危うく従うところだったぞ」
「あれは従うべきでしょ、常識的に考えて」
「あれが常識ならどれが非常識だ」

HAHAHAと笑いあいながら今日の成果を早苗さんたちに報告する。

「結局弾幕のきっかけは気合って事ですな」
「そうだ、気合が大きいほど強力な弾幕、冷静になるほどの確な弾幕が放てる。」

博麗の巫女のように冷静にそして的確な弾幕を放つことが出来る者や

お前の様に力任せに範囲を利用した攻撃をする者もいる。
私も新参だからよく分らんがな」

「魔理沙さんって知ってますか？彼女も大学生さんと似た攻撃をするですけど、

さっきのマスターパーク、オレンジ色でした…一体どこで？」

「即興」

「そうですか」

諦めの境地に入っていることが一瞬にして理解することが出来た。
地味に凹んだ。

「ま…まあ！それほど大学生に才能があるってことだよ！そうへこむ必要はないよ」

「諏訪子様マジ諏訪子！お礼にこのホワイトグリントを覚醒初号機カラーにしてやろう！」

と、おもむろに早苗さんの塗装グッズをとって色を混ぜ混ぜして
ちやつちやと塗装する。

わずか30分ほどで完成した。

「どう？」

「「5万円で売ってください」」

ちなみに私、コレクターなんですよ。

なので多少のプラモ技術は持っています。

次の日、霊夢が紅魔館に情報収集をするという情報を射命丸から得た。

お礼に分子レベルで分解した。

4・弾幕程度は撃てるようにしました(後書き)

こぼれ話

チルノ「大ちゃん」

大学生「ん？」

大妖精「何？」

5・紅魔館は意外と近場にあるものです

分子レベルから再生した射命丸からもう少し情報を搾り出す。
万が一逃げようと言うのなら俺がマスパで吹き飛ばすのみだ。
はつきり言ってミンチより酷い状況になるだろう。

「それは事実かね？射命丸文」

「ええ」

「嘘ついたら分解の刑だからな」

「それは勘弁してくださいよあれ結構痛いんですよ？」

「ならもつと痛いことしてやろうか？」

「勘弁ですううううう！！」

んな！？逃げやがった！！

「俺流マスタースパーク！」

「いいいやああああああああああ！！！！」

オレンジ色のレーザーと共に射命丸も戻ってきた。

レーザーが通り過ぎる時に射命丸の襟首を掴んで再び同じ場所に
戻す。

「ほいっお帰り」

「只今戻りました……あれ？小町さん、また昼寝ですか……ガク
ッ」

しかし意識を失ってしまっでは情報も集まらない。
とりあえず背負って紅魔館の付近……紅魔館ってどこだ？

なら博麗神社に行く事にしようか。

と言うわけでやってきました博麗神社。

「よつと十日間の旅。ふう〜ついた」

「あら、またアンタ？その荷物は何よ」

今回は情報収集に行くためか若干昨日より冷静な霊夢さん。

心なしか先日よりきりつとした表情だ。

いや、できればこれが普通の表情であって欲しいものだ。

「いや〜まあ後ろのオプション装備はほっといてだ。俺も少しばかり紅魔館に用がある」

「……私も今から紅魔館に行くけど、用って何よ」

う…適当な口実を作ったのは悪かったかな…まあいい。

「ああ、門番の手伝いにでも行こうかと思って。

神奈子さんと対等に戦える俺ならバイトにでもなるかな…と思
って」

俺が適当な口実を伝えると、突然霊夢さんの表情が一変した。

「はあ！？アンタあいつと戦ったの！？ただの外の人間が！？私で
も苦労するのよ！？」

「人は努力を有せず目標を超える者もいる！」

「確かにあんたは努力する姿なんて一度も想像できないわね」

一体何故そこまで驚く必要性があるのか。

まあそれはいいでしょう。

「で、どうするんだね？俺も連れて行くのかね？」

「お賽銭箱を見つけ出すには文も出来れば欲しいけど、この状態じ
やね…」

神社の鳥居の下でヤムチャしゃがって状態になっている射命丸。

「マスパしゃがって……」

「一体何が……」

しゅしゅ心配になりながら俺たちは紅魔館へ向かった。

紅魔館、そこは…やたらと赤い洋館である。
妖怪の山のふもとに立つ洋館だ。

…うん、じつは目と鼻の先にあつたんだ……
霧に隠れて見えなかったんだね。

「山の神社に住んでるのに何でここが分からなかったのかしら」
「明らかに初見殺しの位置に立てるからだよ」

霧の湖のほとりにある紅魔館。

大体霧に隠れて湖は確認できたが紅魔館までは分からなかったんだよ。

そうだよ、池でも思ってたんだよ。悪いかバーカバーカ。

紅魔館と妖怪の山はあまり接点がないと勘違いしてたんだよーだ。

「さて、ジャンプを顔に乗せて寝ている中国は放っておこう、今週号だが放っておこう」

門番の美鈴さん、週間少年ジャンプを顔にかぶせて爆睡している
とりあえずジャンプを取って気持ちよさそうに寝ている美鈴さん
の鼻の頭にわさびを乗せた。

「うきや ああああああ！！！！！？？？」

「oh、予想以上のリアクション」

「だ……だ……誰ですかああ！！！！ああああ！！！！鼻がつ！！！！うう
うう……」

さつきの寝顔とは一変して般若の形相になりながら湖に向かつて走り去っていった。

「流石の俺もあの評定されるとは思わなかったよ…寝相に突っ込まれたミサトさんかよ」

「…ミサト？ 魔理沙がよく言ってたわね」

「まさかあいつもシンジ菌に毒されてたのか…幻想郷も末期だな…」

とりあえず敵は撃退。

ここで俺と霊夢さんは分かれることとなった。

霊夢さんは地下図書館へ、俺は咲夜さんかレミリアさんを探しに行く。

死んでもフランには近寄るな、みたいな事を言われた。
まずフランがどこにいるのかすら分からん。近寄るに近寄れない
だろ。

「まあこういつときに限ってそういう部屋に行っちまうんだよなあ
…」

大体こういうのってよくある行動なんだよな……
と考えると突然俺の周りに妖精がこれでもかと言うほど現れ
た。

「しんにゅうしゃだ」「しんにゅうしゃ!」「しんにゅうしゃ!」

ヤバイ、見つかった。

だが落ち着け、相手は子供の頭。うまくだませば何とかなる。

「お勤めご苦労様、向こうでチルノが呼んでたぞ」

「『チルノちゃん!!』『』」

いっせいに外に駆け出した。
ほっこりした。

「侵入者発見」

「アゲッ」

しかしその直後、俺の頭に鋭利な刃物のようなものが突き刺さっ
た。

意識が緊急脱出してどこかへ飛んでいってしまった。

「いってて…だれだよいきなり後頭部にプログナイフ投げつける輩は…」

「咲夜…貴女って人は…」

「わわわ!!! 私は一切そのような強力なナイフなど!!!」

俺が目を覚ました場所は、日の当たる庭とは一変、真っ暗な部屋に縛り付けられていた。

で、俺の目の前にいる人物は…

発光剤でも着込んでいるのかと言うくらい真っ暗な部屋なのに良く見える吸血鬼、

レミリア・スカーレット隊だ。その隣は十六夜咲夜。PAD長で有名な人だ。

「で…なんで紅茶じゃなくてホットミルクを飲んでいるのだレミリアよ」

「突然紅魔館から食料が消えたからよ。紅茶の茶葉も一緒に」

食料の消滅、寶銭箱の消失…ん？どこかで聞いたことがあるシチュエーションだ。

ん…どこぞの同人アニメでのイベントだったような……………忘れた。

「どう考えてもそりゃ異変でしょ、気付かないのか？ゆかりんの陰謀だろどう考えても」

「その発想はなかった」

もう駄目だこの幻想郷……

5・紅魔館は意外と近場にあるものです（後書き）

こぼれ話

早苗「ニュータイプで最強はやっぱりカミーユさんですね」

大学生「メンタル的概念から考えると以外にもシロツコかもしれない」

諏訪子「操縦技能から考えるとアムロだね」

神奈子「他者のコミュニケーションがうまく行っているジュードだろっ」

大学生「最強のリンクスは？」

3バカ「」「有澤隆文」「」

諏訪子「最強のロボットってなんだろうね」

早苗「ガオガイガーでしょう！」

神奈子「天元突破グレンラガンだね」

大学生「ラッシュバード」

神奈子「逆に一番弱いパイロットはなんだろうか」

大学生「カツ・コバヤシだろ」K」

早苗「シンジ『くん』」

諏訪子「うーん……オメガ11？」

6・門番は案外楽しいかもです（前書き）

実際の門番はつまらんことこの上ないが、
やったことないけど。

6・門番は案外楽しいかもです

どうも、大学生です。何とかレミリアさんに霊夢の暴れ許可をいただきました。

俺たちが来たことはとうに知っていたそうで、いずれ魔理沙と射命丸も来ると予知した。

「へえ… 本当に運命とか見えるんだ… ってことは…」

「あなたの運命は何故だか見えないわ」

「いや、外の世界の運命を問おうかと思ってだな…」

「……」

会話が続かなくなってしまった。結局俺は咲夜さんと交渉し、霊夢が納得して戻ってくる間、美鈴さんと共に昼寝… もとい門番をすることになった。

と言うわけで門番役を買って出た俺。いや、暇つぶしだが。

「では、よろしく願いますね。大学生さん」

「あ、おうよ。任せなさい」

「ワサビの件はもう気になさらないでください。昼寝していた私が悪かったんです」

美鈴さんがめっちゃめっちゃいい人だ。

これで昼寝癖がなかったらまさに模範的といえる。

「じゃあ美鈴、大学生、よろしく」

「お任せください」

「了解しました！咲夜中尉！」

しかし今日は秋だというのに小春日和を軽く越し、小夏日和だ。くっそ暑い。そんな中、美鈴さんは涼しい顔をして立っている。俺は近くを飛んでいたチルノと仲良くなって隣に座りながら一緒に門番をしている。

そこの類は友を呼ぶって言った奴、表でろ。

「しっかし…今日は一段と暑いな、お前は大丈夫なのか？」

「あたいはへいき！だって最強だもん！」
「ほえ…最強ね…」

涼をとるためにチルノの頭をわしゃわしゃとなでる。
するとチルノは「エヘヘ」と俺の手を掴む。
これまた涼しいのだ。凍傷というのは都市伝説だったようだ。

「しっかしまあ…ほんとにだれも来ないよな…」
「紅魔館に人が来るなんてバカくらいじゃないしね」
「お前が言っな」

ちらつと美鈴を見ると何時になく真剣な顔をしている。

「いいえ……気を感じます…敵襲ですよ!!」
「なんだとやえ？」

『どいたどいた――――！！！！魔理沙様のお通りだ――――！！！！！！！！！！』

目を凝らしてみると、高速で飛ぶ機影を一機確認した。
黒い機体、茶色の装甲…ドワッジ！？
いや…黒い服に茶色の簞…魔理沙か！！

『そおら！！その門番！！邪魔だ！はい、ここは通行止めよ』
ふげっ！？』

木の棒を魔理沙の飛行コースに向けて横に倒す。
すると見事に引っかかって、簞だけが屋敷に侵入する結果となった。

つまり一本のバリケードに激突して魔理沙は門前払いとなったのだ。

「速さが足りすぎたな、クーガー」

「紅魔館の厄介主を門前払いとは…すごいです…」

「スゴいね大学生！」

あれ？これ…ドヤ顔していいのかな…

とりあえず気絶している俺の嫁をまじまじと眺める。

「いつててて…なにすんだよ!!」

お、起きたようだ。神主曰く10代前半…ってことは14歳辺りだろう。

つまりエヴァのチルドレンの資格あり。まあそれはどうでもいい。おい、何で今俺の顔を見て「ゲ」って言った。俺がそんなにキモイか。

30回以上は言われてるわボケ。

「コイツが噂に聞いた魔理沙か……思った以上に気象の荒そうな子だ」

「人を見た目で判断するなああ!!」

「ほら、もう怒ってる」

「ぐ…ぐぬぬぬぬ……」

やはりその辺は子供だな、子供ってどうも気性が荒くて身勝手なところがある。

まあそこで可愛いかわ可愛くないかが決まるが、おてんばな奴も悪くない。

欲しいものをあげて、十分に遊んだ後、疲れた表情になる。

そこでその子の隣に座って髪の毛をなでてやるのだ。

するとトロンとした顔になってもたれかかるように眠る。

そこが可愛い。

しかし物静かであまり抵抗を覚えない子供もまたよろしいのだ。

抵抗を覚えなくてポーツとしているところで興味を示すものを見せる。

すると少し目を見開いて顔を赤くしながら欲しい、という態度を見せる。

そこで物をあげると、ニパーっとした表情でその物をまじまじと見つめる。

それもかわいい！

「だが、魔理沙が一番可愛い。そのことに関する異論は認めない」

「何だコイツ……いきなりニヤニヤしだして……気持ち悪いぜ……」

「褒め言葉か？」

「断じて違う」

魔理沙も俺の隣に座る。

「そついえばお前は……大学生だっけ？山の神社の新人って奴」

「いかにも」

「……バイトか？」

「んなわけねえだろ、居候だよ。宿無しだかな」

「ふゝん」と魔理沙が相槌を打つ。

「で、なんでその居候が紅魔館に来てるんだよ。バイトだろ」

「ねゝ美鈴、ばいとって何？」

「分かりませんね……」

生粋の幻想郷人にバイトという言葉は伝わらなかったようだ。

「ばっか、霊夢さんの手伝いに行こうとしたら捕まっただよ」

「は？お前霊夢の知り合いなのか？」

「ああ、そうだが」

「へゝ……あの巫女が他人と友達関係になれるのかね……」

一緒に作業するだけでも空気が重くなりそうになるってのにあれはドライな綾波だぜ……」

オイ魔理沙よ、綾波って何だ綾波って……妄想も大概にしろ。

「俺の心の広さは海並みだぞ？」

「お前は少しは話す人を選んだほうがいいと思うぜ……っと、さて帰

るか」

ちらつと時計台を見て腰を上げる。

何だ、帰るのか…

「待ちな、魔理沙よ」

「ん？どーした？」

そりやお前、幻想郷に居るからにはこれは譲れんよ。

「弾幕勝負…やらないか」

「うほっ…いい気迫…」

6・門番は案外楽しいかもです（後書き）

こぼれ話

もしも紅魔郷異変のときに大学生が居たら

大学生「ウラツフランかよお…」

フラン「お待たせ」

大学生「待ったことなどないがな」

フラン「ねえ、あなたって人間？」

大学生「人間とカデゴリズムされる人間はそう多くはない、

その中の人間という種族にカデゴリズムされる人間の中の

一人、

それが俺だ」

フラン「つまり人間なんだね、だましてないよね？」

大学生「人間を偽るってどうやってやるんだよ」

フラン「飲み物にする」

大学生「カレーは飲み物だときいたが人間は飲み物だったのか…

大食漢なのか？コイツ…こええよ…着やせてんのか…

いやいや…ここは話題を変えるんだ。フラン！」

フラン「何？」

大学生「外に出ようではないか！」

フラン「だめだよ」

大学生「何で」

フラン「豪雨でいけないもん」

大学生「傘をさせ」

フラン「太陽が私を虐めるんだ」

大学生「虐め返せ」

フラン「蒸発しちゃうよ…」

大学生「なら俺が意地悪な太陽から守ってやろう、少しずつ慣れるんだ」

フラン「お嬢様に」

大学生「俺から言っでやる」

フラン「……本当に？」

大学生「本当に」

フラン「……ありがとう…」

大学生「例には及ばん（まともに戦っても殺されるだけだしな）」

フラン「……じゃあ明日ね！大君！」

大学生「おう！じゃあの！」

和解END

7・弾幕ごっこに心理戦は必要ありません

「さあ早速始めましょうか!!」

美鈴、何故そう張り切っている。

「お前が言い出したことだぜ、後悔するなよ」

「俺が言い出したことだ、後悔はするがお前に後悔はさせん」

「いい度胸だ、制限時間は30秒。スピード勝負だぜ」

「良かろう、最初の一手で勝負が決まるのだな」

何故か魔理沙も熱くなっている。

俺が勝負を仕掛ける相手は何故こうも血の気が激しくなるのだろうか。

普段温厚…いや、まだよく分からないがやさしそうな神奈子さんも何故か熱くなってた。

「まあそれもそれでいいでしょう…いいか？」
「いつでも」

双方構えのポーズをとる。

俺は棒立ちだけど。

「よろしいですね…？では…始め!!」

美鈴がわくわくしながら開始の光弾を放つ。
ってか審判とか居たのか。

バトル形式は非想天則とかの格ゲーみたいな感じだと思ってればいい。

しかしさっきも言ったとおり制限時間は30秒。可及的素早く決着をつけるのが普通だ。

「だが俺はその常識を覆す。あえて言おう！俺は動かん！」

「ほらっ！動かないと防戦一方だぜ！」

「この戦い、先に動くほうが負けとなる」

ひたすら弾幕をなるべく動かずに避ける。

はたから見れば俺が圧倒的に不利な状況だろう、だが…

俺は平和的に、しかしパワー重視に戦うスタイルだろう、多分。その俺から見ると、こっちの方が有利だ。

「……………」

「な…何で動かないんだこいつ…」

20秒近く無行動で、しかし攻撃に当たらずにいると必ず相手も不審に思う。

それが異変解決という正義的位置に立つ霧雨魔理沙ならなおさらだ。

心は腐っても根はいい奴だ、それが一方的な戦いをしていると罪悪感も芽生える。

「ならこれでおしまいだ！！マスタースパーク！！！！」
「アッー！」

と思った俺がバカだったようだ。

「むきゅ〜…」

真っ黒になって門前に帰還した俺。
やっぱ心理戦は無理だわこれ。

「結局何がしたかったんだお前は」
「最後の5秒辺りで勝負をかけようと思ったんだが」
「甘い、弾幕はパワーだぜ。心理戦など通用するわけないだろうが」
「ですよ〜…」
「じゃっ私は帰るぜ、またな！どう見ても小学生な大学生！」

プツンつと俺の中で何かが千切れた。

「んだとクソ餓鬼イイイイ！！！」

「ん？っひにやあああああああああああああああああああああ
あああ！！！！！」

ドドドドドドドドカーン、と怒りに身を任せて放った8連マスタ
ースパークは

俺の嫁であるがたまに腹が立つ霧雨魔理沙を見事迎撃したのだっ
た。

いいね、怒るって。すつきりするよ。

「あー酷い目に遭った、美鈴さん、今の俺の勝利でいいの？」

「うーん…咲夜さん、いいんですか？そんなに有給貰ってもお

…」

「…んうゝ…すいゝ…」

寝ている美鈴さんに腕枕されながらチルノが寝ている。
まあほえましいのかうらやましいのか…ぱるぱる。

「まあ可愛いから許す」

流石に起こすのもかわいそうだから再び定位位置に戻ってボーっとする。

しかし2ゝ3日間のあいだに俺は凄い体験をしたものだ。

というか幻想郷ってこんなに毎日のように異変やら色々と起こるのか？

リバティーシティーよりタチ悪いぞこれ。

「しかし…俺って東方始めたの何時ごろだっけかな…昔はキモヲタがやることだゝとか言ってたが

こんの数年間でじっくりしっかり染まったものだ…独り言も多くなっただし」

中3辺りだったかな、ちょっとだけ、ちょっとだけって軽はずみにやったら

キターーーーーーってなって魔理沙たんwwってなったんだな。
お前らもそうだろう(チラッ

「さて…そろそろ霊夢さんも帰ってくるだろうな。どうしようか」

こうやってチルノの頭をなで続けるのもいいが…俺にも帰る家があるからな。

もう既に…しかし爆音がきつかりなくなった…まさか…

「霊夢はもう帰られましたわ」

「ですよねーw……あんのクソ巫女があああああああああああ
あああ！……！」

急いで博麗神社に向かったが賽銭泥棒を探しにどこかへ行つてしまつた模様。

腹いせに博麗大結界を少しいじくつたらスキマからペンペンが飛んできた。

ちくせう。

やっとこさの思いで守矢神社に帰ってきた。

結局帰ったときはもう既に日は暮れ、射命丸が鳴き、リグルが光る。

「あーただいまーっ……こう見えて結構暇だっただぞー早苗さん」

「なら少しは手伝ってくださいよ……ぜんぜん信仰が集まらないんで

すよ…」

「こう見えて俺は忙しいんだよ、さっきも異変解決に一肌脱いだのだよ」

「異議あり！あなたの証言は矛盾しています！！」

ちっ…ムジンを暴かれたが嘘ではない。途中までは異変解決していたのだ。

だが最後辺りは暇で暇で仕方がなかった。おk？

「甘い、だが俺は謝らん！と言うわけで明日はお前の手伝いをしてやろう！！」

「少しは謝罪という言葉覚えてください！！」

「一応知っている！だが使わん！」

「使え！！！！」

「仲がいいね、あの二人」

「だが、あの大学生、妖怪化が進んでいるようだ」

「別に妖怪化しても問題ないと思うけど…」

7・弾幕ごっこに心理戦は必要ありません（後書き）

こぼれ設定資料

妄想多、嫌なら見るな。

大学生、勝利台詞

V S 霊夢

「幻想郷も外の世界も苦労人は多いものだよ。

お前のように気楽な奴は少ないものよ、哀れだ哀れ」

V S 魔理沙

「魔理沙は俺の嫁、異論は認めん」

「泥棒猫はしまっちゃんおうねえ」

V S アリス

「ローゼンメイデンの目指すものがコイツか…何か怖い」

V S 咲夜

「俺は人間をやめるぞオオオ咲夜アアア!!」

「時が止まつてる間の現象、何ていうの? ベルベットルーム?」

V S レミリア

「スカーレット…あーケンプファーにやられてた部隊の事か」

「運命を見れるとしてもそれが真実とは限らんものだ。
実際運命が変わって生きる奴も死ぬ奴も居るかな」

V S 美鈴

「中国って餃子は水餃子がメインらしいですね、初めて知ったよ」
「美鈴さんって結構な長生きでしょ? 三国志とか居ました?」
「劉備とか、色々と、え? 居なかった?」

V S 早苗

「お前!! オーバーブーストは卑怯だつての!! 待てコラ!!」
「緑色…ザクと同等のレベルか、緑は可愛いそうな奴だ」
「お前の学校の期性、相当ゆるいんだな、緑の髪が許可されるって…」

「で? 結局お前の中の碇シンジってどんな奴だよ」

V S 諏訪子

「よし、今日はロックマンXのフィギュアの塗装をしましょうか」

「カエルって鶏肉の味がするって咲夜さんが言ってたけど…」

「実際信仰が集まらなくても幻想郷なら消えやしませんよね」

「碓辛ジの事、ちょっと教えてくれませんか？

いい加減いいでしょ？気さくなシンジってことは分かるんですけど…」

V S 神奈子

「あ、そつだ神奈子さんのガンダム試作2号機、

エヴァ式号機カラーに塗つといたよ」

「その鏡…いくらくらいで買ったんですか？」

「うちの友達に農業学生が居てね、

ちよつと彼の作物だけ育ててくれませんか？

ノート点が悪いから実習成績で稼ぎたいとか」

続きます

8・信仰が集まらないのはいつもの事です

紅魔館偵察から1週間後

朝です。どうも、清く正しく他人に優しい正直者の大学生です。最近幻想郷という存在に慣れて来て、言葉が軽くなった。

明らかに目上の人以外の人物ならタメ口で話せるようになったのだよ。

ちなみに最近霊夢が寶錢箱を取り戻したらしい。

人騒がせな巫女だ。まあいい。それもはや気にする事ではない。

それよりもっと気になることがある。

「早苗よ」

「ふえ？なんですか？」

「信仰というものは茶屋で団子を食べることを意味するのかわかるか？」

人里に下りた俺と早苗、信仰活動をするとう聞いたがそれは俺の幻想だったようだ。

にぎわう人里の茶屋でニコニコしながら茶をすすり、団子を楽しんでいる。

俺？んな金があると思ってるのか。お冷をもう13杯は飲んでるんだよ。

「早苗」

「なんでしよう」

「一個貰っちゃダメかな？」

「一個貰っちゃダメだよ」

なんという鬼畜巫女、というか巫女なのか？現人神じゃなかったっけ？

まあ巫女でいいや。

「お金を浪費する愚か者はお冷でも飲んでなさい」

「ケチ、んなこといって昨日のプリンジャンケンに負けて大騒ぎしてたのどこのどいつだ」

「な…あれはどう見ても大学生さんの後出しです！」

「後出しは駄目だと誰が言った、最初にルールを決めなかった3バカが悪い」

「ほーらやつぱり後出しじゃないですか！！もういいです！あげません！」

「最初からあげる気などないだろうに」

茶屋で繰り広げられる不毛な争い。

何時の間にやら茶屋は2人だけとなっていた。

空気を読んで出て行ったのかどん引きしているだけなのか。

この世は皆衣玖さんなのですわね！！

「まあいい。気にするな。食ってしまったものを吐き出すわけにはいかんだろ」

「…」

そうむくれるでない。全く、プリンごときで何を騒ぐか。

お前のその胸部にプリンが二つあるだろ？それでガマンするんだ。

「今何か目がいやしかったですよ」

「何を言っているんだ。俺は紳士だ。そのようなことは考えない」

「紳士の前に『変態という名の』が抜けていますよ」

「抜いているのだよ」

「……（ササッ）」

「そういう意味じゃない」

日本語は、難しい。

「信仰しとくれゝ悪い事は言わんから」

「信じると悪い事は起きません！誰か参拝に来てくださーい！」

ひたすら俺たちはティッシュを配り続ける。

そのティッシュの中に何故か大きな目玉のあるティッシュがあったが気にしない。

多分デザイン上の都合だろう。

「よろしくおねがいしまーす！守矢神社です！よろしく願いします！」

「あーうん、信仰してちょ」

日が暮れるまでずっとティッシュを配り続けた。
だが信仰集まらず。万策尽きた。八方塞がった。案外ティッシュ
売れた。

「なんんつで信仰が集まらないのよ!!」
「そりゃティッシュ配りじゃあなあ…」

ティッシュ配りで信仰するってどこまで最先端技術行ってるんだ
よ守矢神社。

「俺は気長に待つ派だな」
「こないなら!!こさせてみよう!信仰!!」
「こないなら、くるまで待とう、信仰だろ」

しかし、今日は見事なまでに来なかったな。

いつものことだが、話を聞いてくれる人位は居たぞ、何で来ないんだろうか…

「まあ気にしても仕方ないよ、うん。だからその振り上げた斬艦刀を下ろせ」

「は…！ごめんなさい！いつもの癖で！」

コイツが一人で信仰を集めに行ったときの乱心ぶりが逆に気になる。

いずれうどんげ辺りに「どうしてこんなになるまで放っておいたんだ！」的狀態になる。

…？そういえば最近朝帰が多いな……………もしや…

「ないない……………それはない……………」

「どうしたんですか？帰りますよ？」

「あ、はい！」

「？」

秋の宴、とか言うものが始まった。守矢神社の新参社の歓迎会らしい。

ちなみに賽銭箱を盗んだ犯人、そいつは…俺も聞いてない。
くそっ…今度ペンペン人質にとってやるかな。

「俺たちが主役か、いいもんだな、諏訪子さん…あれ？諏訪子さん？」

神社の賽銭箱の上で酒を飲んでいると、忽然と姿を消した諏訪子さん。

きよろきよろと見回してもいない、ちょっと空を飛んで屋根の上を見た。

月を見上げて神奈子さんと一緒に飲んだ。

「…何年ぶりだろうね、こうやって二人で飲むのは」
「もう何1000年も昔の話だな……」

なにやら思い出話に浸っているようだ。

流石に邪魔をしたらまずいだろう。

ここは衣玖さんになるんだ。

…気になる、いや、駄目だ。

「うん、ここは邪魔しちゃ悪い」

しぶしぶ屋根から下りた。

降りた瞬間、待ち伏せをしていたのかどうだかは知らないがカメラを持った射命丸がかしゃかしゃっと写真を撮った。

「おっと」

「大学生さ〜ん、良かったですよ〜さっきの優しい顔」

「お？文か」

月光蝶を呼ぼうとしたが、手帳を目の前に突きつけられた。

「おおっと！分解蝶はNGですよ！」

「貴様は俺の見てはいけないシーンを撮ってしまった」

「そんな〜酷いですよお〜…ね、ね、いいでしょ〜？取材させてくださいよお〜」

うう…上目遣いで見るな！可愛いじゃないか！！

「よ…よおし！いいだろう！今日は特別だかな！」

「よかったあ〜これで断られたら早苗セクハラ合成写真を一般公開でしたね（ ）」

「お前…サードインパクトって知ってるか？」

「人類が滅亡するのでやめてください」

「いいネタが取れました！ありがとうございます！！」
「じゃあの」

射命丸が行った。とりあえず俺も月を見ながら酒を飲んだ。

「そういえばあの月にはタブハースとかあるのかね……」
「あの月でシンジさんは元気に暮らしてますかね……」

俺の隣でほろりと早苗が涙を流した。

早苗……そんなに悲しいのか……

「……………早苗……」

「なんですか……大学生さん……」

「妄想癖も大概にしろ」

何故か弾幕を受けた。

8 信仰が集まらないのはいつもの事です（後書き）

こぼれ設定集 続き

V
S
鈴
仙

「座薬って痛いんだよなあ……お前も入れるか？」

「銃の腕なら負けねえぞ！俺の愛銃はコントローラーだがな！！」

V
S
衣玖

「き
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

ああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ

イクサアアアアアアアアアアアアアアアアアン!!!

!!
L

V
S
天子

「パターン青！！使徒です！！」

「20番目辺りの使徒だな、お前は！殲滅してくれるわ！！」

V
S
射命丸

「月光蝶である！」

「お前にはお仕置が必要だね……月光蝶！！」

V S 紫

「B B A ! B B A ! ! B B A ! ! ! B B A ! ! ! ! !」

「胡散臭いと職質受けやすいよ。もう少し質素に、そして謙虚に生きろ」

V S 小町

「秋田県の米は帰ってくれないだろうか」

「死者の箱舟：10円払うから乗せてくれ」

「割に合わない仕事だとは思わないのか？」

V S 空

「今の時代核融合は洒落にならん、外の世界に行って全力で謝罪しろ」

「バスター？なら俺は幻夢零だ」

「お前のボスのさとりさんの持つサイドアイって奴、ハッカー？」

V S シンジ

「オイ、お前がシンジだな、ちょっと来てお話ししようか」

「初号機パイロット碇シンジ……侮れん相手だね……」

「お……俺のドッペルゲンガーだったのか！？お前と俺が！？」

9・宴会に最後に残る人は大体決まっています

宴会が終わり、静かになった守矢神社。

あれほど騒いでいた妖怪たちも寝静まり、一部の妖怪は帰帰路についていた。

ちなみに俺は神奈子さんがいないとうまく飲めないからちびりちびりと飲んでいるだけだった。

故にあまり酔っていない。

ちなみに3バカ神は皆自分のところで寝た。
今新参で起きているのは俺だけだ。

まだ飲んでいる奴らは、博麗霊夢、伊吹萃香などなど
結構な酒豪ということと有名な奴らだ。

ふむ、……常に酔ってる萃香がなぜここまで来て飲むのか……
ちよつと気になるが俺も巻き込まれそうだ。

「まあ別に神社で酒飲みは京都御所で花見をするのと同じような感じだろう」

時々ニユースの天気予報とかで花見してる人見るけど

あれって实际いいのかな？なんか失礼みたいな感じが漂うんだよねあ……

まあ神様関係じゃないってことは分かるから別にいいか。

『おい！だいがくせー！こっちに来なさいよー！』

ん？注文か？

「はいよ」

そんなノリでふわりんこと霊夢と萃香が飲んでいる場所にとんだ。
しかしそれが間違이었다。

「お？あれが例の弾幕避けだけが一級品の」

「オイコラそのチビ鬼、今なんつった」

「私かい？玉避けが上手な人間もどきに答える舌は持たないよ」

「あゝ！？（碇…怒りボルテージ上昇中）」

そうだ、萃香って原作設定ではかなり生意気な性格だったんだな。
落ち着け、ここはCOOLになるんだ。

「そういえば居候だつて？可愛いそうに」

「ええ…（ビキビキ…）」

「そういうところが非力なんだよねえ、人間ってのは。私なら自給
自足するよ」

「申し訳ございませんねえ……非力で…鬼のような馬鹿力は持つて
ませんので」

「力こそが全てさ」

「俺は傍観がメインだ」

ヤバイ、何から何まで意見が合わない。

大体コイツ最初見たときから気に入らない奴だったんだよ。
だが二次創作を見て見方が変わった。めっちゃかわええ。

…だが今日！その見方が戻った！！

「人間にもプライドってものがあつてだね」

「じゃあそのプライド、ズタズタにしてやるよ」

「ほう、先週辺り魔理沙に負けて、それ以来負け続け、いい加減腹が立つてるんだ」

「じゃあその敗北記録を更新することに「圧倒的勝利！！！」うがつ！？」

いくら酔拳で強くなろうと、いくら質量を替えようと、この『不意打ち』にはかなわん。

腕をうならせたアッパーに軽いからだか空中に浮かぶ。

「局地用マスタースパーク」

「あぎゃあああああああああああ！！！！！！！！！！」

卑怯？なんとでも言え。勝てばいいんだ勝てば。

その後、満身創痕の萃香と和解。案外いい奴だった。
酔った霊夢は色々と自慢話をするが、酔ってる割には結構表現力のある奴だ。

「しっかしあの東風谷早苗って奴！何かいけ好かないのよねえ！！」
「お…おい霊夢？どうした？」

「早苗が何か悪い事としたのか？」

やさぐれいむと化した霊夢が酒を飲みながら続ける。

「何か香霖堂でうつすい本買ってニヤニヤしたりとか！巫女としてありえないわよ！

ちったあ神にも気を使いなさいっての！なんなのよあいつ！気持ち悪いわね！！」

「薄い本？絵本？」

「同人誌買ってたのかあいつ……」

そつえば同人誌には余り手を出したことはないな。
今度早苗の部屋にお邪魔しましょうか。

「まあ気に入らない点といったらそのくらいなんだけど…神の忠誠心もまあまあだし」

「神すらいない神社に参拝客が来るとは思えないがな。うちの神社の方が数千倍いいわこれ」

「う…うるさいわね、少しはアンタもお賽銭入れなさいよ」

「だからお前の賽銭箱は募金箱かと、利益くらいはあるんだろうな」

祭神の居ない神社、博麗神社。印象的な名前、結構有名な神社だ

ろっ。

だが！そのような神社に神がいなかったら賽銭箱などただの募金箱！

いくら神を呼ぶことが出来るからって偏狭＋NO祭神では来ないのも当たり前だろうが！

とか言ったら殴られかねないから黙っておこう。

「まあいい、お前らもそろそろお開きにしたほうがいい。明日もあるだろう？」

「だいがくせー、お前酔わないのか？」

萃香が酒がなくなつた徳利を揺らしながら俺に尋ねる。
酒の匂いがぶんぶんしやがる。毎日飲んでるのかこいつ。

「酔ったら明日に響くだろ？二日酔いは好きじゃないんだ」

「あの酔い具合が楽しいのに、人生12割は損してるよ」

「10でリセットされて2割に戻る。…結局かなり損してるな俺」

そんなこんなで神社を出る2人を見送った。

「ふう〜終わった終わった……さて帰るか……」

まあいいや、帰ろう。明日は早苗も休むだろう。

……明日は暇だろうな。と風呂場に行こうとすると明かりがともってた。

その中からはやけに上手な歌声が聞こえる、ロボソンだけど。

「……………早苗は風呂か……………」

ちなみにその付近からステルス状態だがフラッシュは消していない盗撮者が居る。

もちろん俺が気付かないわけがない。

「これはいい記事になりそうですね！山の巫女！プライベート写真！読者リクエストですからね！私は悪く……」

「へー、帰る姿が見えないと思ったらこんなふしだらなことを……文ちゃ〜ん」

毎度おなじみ月光蝶でカメラだけを残して射命丸を処分した。
ちなみにそのカメラ、紫のスキマに投げ込んだいた。

これでまた外の世界の工口画像が増えることを願って…

9・宴会に最後に残る人は大体決まっています（後書き）

こぼれ話

チルノ「だいだらぼっちはどこだろう……ねー知らない？」

大妖精「ごめんね、私も知らないんだ」

チルノ「そっか……大学生に聞いてみよう」

守矢神社

チルノ「天狗たちから逃げ続けてたけど最強のあたいだからすぐに着いた！」

おーい！大学生！だいだらぼっちって知ってる？」

大学生「だいだらぼっち？大入道か？日本でよく知られる巨人の事だ。」

大きな人の事だな、そのだいだらぼっちは

沼や山を作ったって言うことで知られているんだ。

だいだらぼっちの涙は湖を作ったりもしてた。

色々と自然に関係してるんだよ、だいだらぼっちってのは

ちなみにだいだらぼっちっていう名前の^{だいたろう}おおひと

大人を意味する大太郎

それに法師を追加して大太郎法師、

それを略してだいだらぼっちってなったわけ。おk？」

チルノ「さすが大学生……天才ね」

大学生「世間一般での常識さ」

早苗 「そういうのをネタにマジレスって言うんですよ」
諏訪子 「……知らなかった」
神奈子 「同じく」
早苗 「えっ」

10 スキマに入ってもテンパってはいけません

12月の末になった、そろそろ受験の子も居るだろう。

ちなみに俺はまだ夏休みです。だって幻想郷に居るんだから大学などいけるはずない。

そう、俺は永遠の夏休み、それどころか搜索願を出されているだらう。

「さて：今は冬、そして人里の畑の前！そして俺がやるべきこととお――それはああ――！！」

冬の野菜、しかし大根にあらず。その野菜の名、それは……カブ！
そう、この日のために育てていたのだ！最近。

ある少女からカブの種を無駄に貰ったのだ。花と野菜が大好きだとか。

どこのルーンファクトリーだよ、と俺は問う。

「だがそのようなこと！俺の気にするべきことなどではない！私の知が早く収穫しろと叫ぶ！そして俺は収穫する！だが……」

俺はその場で息を吸い、叫ぶ。

「寒いんだあああああああああああ！……！！！！！！！！」

「と言うわけでカブを収獲したんですが…」

何故か大量のカブを持って博麗神社に来た俺。

こんな俺でも少しはやさしげな心を持ちたいと思っています。

ええ、そうですとも、突っ返されたんだ。34分の1だけ神奈子
さんたちがとって。

あゝ…こんなことになるんだつたら間引きしときゃよかった。

「あら、お賽銭かしら？」

「神奈子さんたちに渡したらそんなに要らないと突っ返されちゃっ
てね、いるかね？」

「もらえるなら全部貰つとくわよ」

「そうしていただけるとありがたい、ちょっと訳有りのカブだがな」
「？」

カブの入った風呂敷を開くと、四次元ポケットからぶっ飛ぶように
雨のようにカブが降ってきた。ええ、そうですよ、めっちゃある
んだ、カブ。

100分の1で300個くらいかな、多分。

「私の気持ち！受け取ってください（ハート）」

「ええ、貰っておくわ、40分の1くらい」

「1分の1なんてどうだい？」

「私に一生カブを食べ続けると言うのかしら」
「YES、ケストレル「悪いけど、自分で管理して頂戴」キャリン
グバッグつけるよ」

風呂敷の中からカブの形をしたキャリングバッグを取り出す。

「それはちょっと欲しいかも」

「なら貰え、それではさらばじゃ「待てコラ」やーだよw」

「こ…こら！待ちなさい！！！！まってええ！！！！こんなに食べれな
いわよー！！」

「ついてくるでねえやい！」

「こんの（ジユツ）」

平和的にカブを譲った。やっぱり俺は他人に優しいね。
あ？虹色の蝶が見えた？気にするな。

さて、つたない前置きはこのくらいにして。……いや、あれを本編で次話行こうぜ。

な？俺さ、今の状況を話数またぐまでにやり過ぎからさ。な？

「誰か今の状況を5文字で説明してくれ」

「スキマ入り」

「ありがとう………で…ゆかりん…お前冬眠しないのかね？」

「スキマは温度調節できるから大丈夫よ」

「うむ、ならよろしい」

そう、私が目を覚ました場所はスキマだったのです。ええ、スキマ。スキマだ。

うん、俺ってさっきまで冬の空を飛んでいたはずなんだ。

「あーそうか、ついに俺も帰るときがきたのだな」

「私に還るの？生まれる前？言っておくけど今帰ってもまた同じことになるわよ」

「同じことって？」

「また同じ世界を繰り返したいの？碇シンジ君」

………思考停止………

「…は！今なんと？」

「碇シンジ君、貴方は赤い海でほとんど変わらない世界を繰り返したいのかしら？」

「……………ゴメン、悪玉コレステロールの大きさは胸囲に関係するのか考えた、もう一度」

「現実逃避はやめなさい」

だ…だってよ、さっき言われたんだ。俺は碇シンジだって？wh
y？俺がシンジ？

に…日本製なのか？そのシンジ、中国製シンジなら考えよう。
だが、俺が国産シンジになってただって？

「おい、下手なしゃれはやめなしゃれ」

「冗談じゃないわ、本当よ？」

「おし、お前の言いたいことはわかった、仮に俺がシンジだとしよう、じゃあこの体は何だ？」

俺の体を自分で触りながらゆかりんにアピールする。

大体あんなヘタレ坊主になってたとしてみる、一生黒歴史だよ。

人生で思い出したいくない思い出NO1に見事輝くわ。

自分が綾波といちゃいちゃしていると思ってるだけでぞっとする。
釣り合わない。

仮に俺がいちゃいちゃできたとしても絶対綾波が拒否する。

「抜けたんじゃない？」

「は？」

毎日抜いてるけど。

「貴方の魂…と記憶」

「そんなうまい話があるわけない」

「まあ第3新東京市の人々に会えたなら、思い出すかもしれないわね」

「アニメと現実を混ぜるな馬鹿者、だが俺は実際に幻想郷があると信じていた。

故にあつた。それは礼を言おう。八雲さん、だが俺がエヴァの世界に居ただと？

そんな二次小説的な展開があるとでも？片腹痛いわ」

全く、早苗と言い魔理沙といい、コイツと言い、一体なんだってんだ。

皆シンジスキー粒子に犯されているのか？いずれこの粒子、ミサイルを無効化するぞ？

「あー…もういいわ、信じ切れないのなら信じなくていい。

で？貴方は帰ったところでどうするのかしら？」

「普通の大学生活を送りたい、だがこの暮らしに俺は満足している。

故に俺は幻想郷で天寿を全うしたい」

「無理ね」

「え？」

「あなたは死なないわ、人妖だもの」

oh…

「何時の間に俺は人外になったんだアツーーーーー」

「！！！！！！」

「うるさい、じゃあ私は寝るわね、ばはは〜い」

俺はスキマから放り出されて再び元に戻った。

「よっこい正一…って寒っ!!」

「あ、大学生だ」

「やはりお前かチルノ」

振り向くと首をかしげたチルノが立っていた。
何をポカーンとしている。

「どした？」

「霊夢が凄く怒ってた、大学生はどこなのよおおお!!…とかどな

りちらしながら」

「やっぱ怒ってたか」

やっちまったな」と呟くとチルノが続ける。

「あたいがかくまってやつてもいいわよ!」

「そいつはありがたい」「かくまう必要はないわね」「アチャ」

「なにな何の用ですか? 霊夢様」

「: 大学生! 不意打ちとはいいい度胸ね!! 私と勝負しなさい!!」

「勝負か? 負けねえぞ、行くぞ!!」

「ふふ」

「じゃーーーーーんけん!!」

互いに距離をとって、身構える。

「おk、3……」

俺と霊夢、同時にスペルカードを出す。

「2……」

霊夢が何かを詠唱する。

俺はただ単にスペルカードを浮かす。
人妖ならば、妖力を込めているはず。

「1……」

霊夢は腕を上げ、スペルカードを光らせる、あれ？あれってただの紙じゃないの？

と、気にしながら俺は指を光らせ、手の甲にハートに2本の剣が

刺さっている紋章を出す。

「神指『ゴッドフィンガー』」

「霊符『夢想封印』」

10・スキマに入ってもテンパってはいけません（後書き）

こぼれ話

大学生「絵をかいているのか、マチユピチュ、なんだそれは」

マチユ「これは…碇シンジだ」

大学生「タラちゃんだな、で？これは？」

マチユ「お前だ」

大学生「……………三河屋…？（うちのアニキに言われた、リアルに）」

マチユ「これは…霊夢と早苗だ」

大学生「さくらももこが書いたらこんな感じになりそうだな…（同じく）」

マチユ「絵師iiiiiiiiiiii！！！！誰かかいてくれえええ！！！！」

11・霊夢はやっぱり強かったです

「うゝ…ががががw」

流石に射撃技を格闘技で相殺は無理があった。

3分の2は相殺できたが後の3分の1を遠慮なくいただく羽目になった。

「いつてて…だがこれしき、ダメージのうちには入らんぞ」

「嘘でしょ…」

夢想封印、ちなみにこの技は霊夢の十八番とも呼ぶべきものだ、多分。

ちなみにこの技で色々とやりくりして夢想転生やら色々作ってるらしい。多分。

ちなみにおおむね俺の多分は間違っていることが多い。多分。

「さて…問題はこの私に…この主人公を倒すことが出来るかどうかの問題だな…」

霊夢はびっくりするのをやめ、再び俺の様子を伺う素振りを見せる。

油断している様子は微塵もないようだ。

と言うかカブ貰うくらいすんなり受け止めるよ我が儘巫女が。

「だが…この世に光より早いものは存在しない！」

「…マスタースパークか……」

対処法を知っているのか、霊夢が妙な動きをする。

あれが俗に言うグレイズ…と呼ばれるものか。

「ばあかめ！！！！1億8千万kwの力あ！！受けてみやがれえい！！！！
2枚目えい！！電砲…ヤシマ・ストラテジイイイイイイイイ
イイ！！！！」

スペルカードを放り投げ、両腕に可能な限りの霊力を込める。
するとオレンジ色の砲身をかたどった物が完成し、霊夢に照準を
合わせる。

「相当な大技ねえ、でかけりやいってもんじゃないのよ？」

「ああまいなあああ！！！！ヤシマ作戦は砲撃だけではないイイイ
イイイ！！！！」

照準あわせええい！！！！ミサイル全弾発射ああアアアア
アアアア！！！！」

俺の足元から青色のリングが現れる。流石にミサイルの再現は不
可能だ。

リングから無数の光弾が飛び出し、角度を調整して霊夢に向けて
突き刺さるように落ちる。

「よっ、ほっ、ほいっ。追跡って言っても大したことがない。
所詮はアンタも人妖もどきってわけか…残念ね、大学せ……」

霊夢が気配を感じ取ったのか、全て避けきった後動きが止まる。

「……………男の充電率無限大…大学生をなめては困る」

動きを止めたそのときが最後、あんたの敗因は美しさにこだわったことだ。

思いやりやら、力の平等やらふざけた理念はいらん！！

「力こそが…全てじゃあああああああああああああ！！！！！！！！」

爆音が響き、巨大なオレンジ色のレーザーが射出される。

そのレーザーはさえぎるものを全て焼き、地面をえぐり、巫女に向かう。

「っ！博麗弾幕結界！！！」

霊夢が2枚目のスペルカードを使う。巨大な結界と弾幕だ。それによって砲撃が防がれる。流石は博麗大結界を管理している

だけはある。

というか押し切れるのか…？

「いいや！押し切れ！！！！！！」

「結界に亀裂…！？」

「頑張れ頑張れできる絶対できるそうそこだ気持ちの問題だ
気持ちの問題！！！！」

いったん腕を引いて、体をそらす。そして、

「もつと熱くなれよおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお！！！！！！」

腕を押し付けるように再び体重をかける。

「いやああああああああああ！！！！！！！！！！」

その衝撃に結界は耐えられなかったようだ。

閃光と共に博麗霊夢と結界の残骸は紅魔館の外壁まで吹き飛ばされた。

「カブのお買い上げありがとうございます」

ところ変わって守矢神社

「たっだいま」

「お帰り、大学生…ふあ…」

迎えてくれたのは神奈子さんだ。
なにやら淒く眠そうだが…

「どうしたのだ？神奈子さん？」

「さつき起きたばっかよ…全く…朝早いつてのはきついねえ」
「朝飯作ろうか？」

「悪いね、もうすぐ早苗も起きると思うから、一応二人分」
「はいよ」

ふと時計を見た、9時か。結構早かったんだな。

と、ちよつと呟いてからラップ（香霖動産）を数十枚用意。
その上にごはんを均等に乗せる。

「具は…梅干、ツナマヨ、博多の塩（固形）…後適当にシヤケでもいいか」

「そついえばさっきから霊力が激しく漏れてるよ？何やってたの？」

神奈子の質問におにぎりを神奈子に一個投げつけて説明する。

「霊夢と一戦交えてきた」

「ほお、勝ったの？」

「ギリチョン」

「おお、やるじゃないか…でも向こうは恐らく本気じゃないだろう」
「それは当然だ」

霊夢が俺みたいにな奴に負けてたら、俺が幻想郷最強を名乗ることになるじゃないか。

少なくともそれはない。

「彼女の本気を知りたいのなら異変を起こすくらいしか道はないだろう」

「異変？」

二つ目のおにぎりを片手で投げ、加奈子さんがそれを口に運ぶ。

「ん…ん！？んんんんんんんん！！！？けほっ！けほっ！…！？」

「なはは…引つかかりやがったな…w博多の塩だよ！」

「げほっ…ぐ…ぐうぬぬ…人間風情が…！！！」

「神奈子様？何を…わぁ…美味しそうなおにぎり…大学生さんが？」

緑色のパジャマ姿で寝室から出てきた早苗。
寝ぼけ目をこすりながら寝癖を立てている。

「よっ早苗。飯は出来てるぞ…オイ神奈子さん、早くそこでもがいてないで何か飲んで来いよ」

「…苦しくて動けない…」

「引つかかる奴が悪い」

「むう…」

しぶしぶ台所に向かって00コーラサワーを飲む神奈子さん。

飲んでも中身が飛び出さないコーラらしいが…どこで買ってきたんだろう。

「さーて！大学生さん、一緒に食べましょう！」

「お？いいよ」

「じゃあ座ってください」

どっこいしょ、と畳に座って手を合わせる俺と早苗。

だが残念だったな、博多の塩握りは一つしか作ってないのだよ。

「ごちそうさまでした！」

「お粗末さまでござえやした…味噌汁は投げられないよな…」

今日も幻想郷は平和だった。

11・霊夢はやっぱり強かったです（後書き）

こぼれ話

カヲル「君は今月に居るんだよ、碇シンジ君」
シンジ「そんなの分からないよカヲル君！！！」

何で僕は月に居るんだよ！！僕が何をしたんだよ！！！！」

12・地靈殿に向かっても仲良くしましょう(前書き)

昨日? ああ、寝てた。

12・地霊殿に向かつても仲良くしましょう

「やあその妖精ちゃん」

「？」

「チルノさんはどちらへいらっしゃるのですか？」

緑色の髪で妖精らしい姿の小さな少女に尋ねる。

その俺の呼びかけに応じたのか周りの妖精もきよとした表情で俺を見る。

「……」

そのきよとした表情の妖精が俺に指でつついて『ついて来い』と言う素振りをする。

さすが自然、不自然な俺を不思議な目で見る。

で、その妖精たちと一緒にいてきた場所が。

「ココ」

「ありがと……ってアリス？」

草むらの陰から見えるのは魔理沙と一緒に居るアリス。

というか俺も魔理沙もなんで瘴気が平気なんだろう。俺は人妖だからいいとして。

魔理沙は普通の魔法使いだろ？あれか？実は常にATフィールド的なあれを張っているのか？

「ウン、アリス」

「なんだってこんなところに？」

「アツチ、アツチ」

妖精が指を指す方向には、現在再生中の氷があった。
アリス、魔理沙、氷となったチルノ…

「粉々にされたと？」

「ウン」

「魔理沙…恐ろしい子」

「マリサ、コワイ…」

まあ、魔理沙でもいいや。

正直暇だからここに來たんだし。

「ありがとうよ、妖精さん。こいつは礼だ。とっておきなさい」

ポケットからサイサリスを作つてるときに余つたビームサーベルのパーツを渡した。

妖精は不思議なものが好きだそうだ。

だが俺はそれ以前にキットの中に何で3つもサーベルがあつたのかを問いたい。

多分発注ミスだろうが。

「！……………」

サーベルをつまんでキャツキャとどこかへ飛び去つていった。

「というわけで……………」いや…ここで行くのはフラグを立てる専門のフラッグファイターだ」

ここはオリ主とは違って普通に考える男になれ。

そうだ、アリスと魔理沙は百合関係なんだ。

あ、百合って言うのは花のユリではなく、レズって意味だぞ。

で、アリスはヤンデレ。魔理沙は不器用な女だ。

ここで俺が現れたらアリスが俺に矛先を向けるだろう。

そうしたら流石に俺は死ぬ。読者からしたらおいしい展開だが……
ん？電波が……

「……ふむ……ガイアが俺にささやく、逃げろと」

ここは大人しく退散だ。普通の人間の判断だな。

穴があつたら入りたい、そう、俺は地霊殿に来ています。なが
いながい穴を降りてから

ヤマメを始末し、パルスィとシンクロ妬ましいを連発し、
についにやってきた旧都。結構な鬼が居る、鬼の楽園とはよく言
ったものだ。

「後でさとりに会いたいが……まあいいか。勇義姉さんに俺は

用があるんだ」

しばらく歩いていると鬼たちが奥で宴会を交わしている光景が見えた。

こついうのって本当にあるんだなあ…と常々思う。

『ほつら！もつと飲めー！ホレお前さんもー！』

『うつす！勇義姉さん！！わしも飲みやす！！！！』

宴会の中心でフィーバー状態な鬼の女性は、真っ赤な鬼とは対照的に色白だ。

そう、あの人が星熊勇義である。というよりなんで鬼は赤いのか少し気になる。

何でだろうか…まあいいや。

こついうのは素早く溶け込むのが重要だ…スネークしながら行くぞ。

「おやおや…もう酔いつぶれちまったのかい？だらしないねえ」

真っ赤な鬼がさらに赤くなって色々なとこれで転がっている。
それでも皆一升以上は飲んでいる。こいつら化け物か。

「まあ鬼にも限界があるっすよ」

で、さりげなく勇義姉さんの隣に座って酒瓶を一本拝借する。

「お？まだつぶれてない奴がいたか、ほれ飲め…」

「ありがとうござえやす」

「いいって事だよ……………ん？」

不審な顔をしてマジマジと俺の顔を見つめる勇義姉さん。
角を俺の額当てながら「んん？」と顔を見つめ続ける。

「お前さんは妖怪かい？それとも人間？…まあどっちにしろ鬼ではなさそうだねえ」

「いい質問だ、その少女。私は鬼ではない、そう、我こそが人妖だ」

「……………まーいいか！」

「その心意気やよし！」

「けど人間だったらずくに酔いつぶれちまうだろうね」

残念ながらそうなのである。いやあこんな世界に誰がしたものだ
ろうか。

人間は酒に弱い生き物なのかねえ？

「まあいい、久々に私も腕を振るうかな？」

と、すくつと勇義姉さんは立ち上がり、勝負しようか、と俺を見る悪いよ、この顔悪い微笑みだよ、ブラックラグーンの微笑み方だよ。

「oh…鬼は出会ったばかりの奴とは勝負すると言っ習慣があるのか？」

「もちろん、鬼はある意味戦闘種族のようなものだからね」
「なるほど…」

酒を飲む手を止め、勇義姉さんの隣に立つ。

「やるか？」

「いや、俺は死ぬのはまだ早いと判断した。勝負は万全の状態であったほうが楽しいだろ？」

「それもそうだ…お前…中々見込みのある男と見た」
「しかしそういう男ほど童貞が多い」

だが、人間は童貞だからこそ強くなれる年齢がある。
そう、30を超えたころだ、人間は30まで童貞を貫くと魔法使いになる。

俺はあと何日で20になる。それまで魔法はお預けだ。

「それにまだお前は餓鬼か、ますます面白い。気に入ったぞ！」

「お？貴様俺を気に入ったか」

「だがその口調はどうも好きになれん」

「ですよね」

まあ鬼に気に入ってもらえただけでも大きな進歩だ。
と言うより一戦交えて全身の骨を折るような末路をたどらなかつ

ただけマシだろう。

「あと、俺は弱いから」

「噂に聞く博麗の巫女を下した人間が言う口かい？」

「知ってたのかよ」

結局こいつはわけが分からん。

夜、守矢神社

「で？また盗撮されたと」

「はい…またあの射命丸さんから」

「なるほど、ちょっと天狗の里滅ぼしてくる」

天狗の里

「さて…と！これで早苗さんの秘蔵写真集の完成ね！」

どれほど盗撮に命を懸けたのか、100枚以上の盗撮写真を入手していた射命丸。

全て生写真、無修正の写真がそろっている。

これは全て読者サービスだと言うが、果たして本当なのかは定かではない。

「これで全て終わりねえ… やつとこれで全部終わったわ… 今日寝よう」

『スーパードズマキイイイイイック!!!!!!!!!!!!!!』

「きゃあああああああああああああああああああああ
あ!!!!!!!!!!」

昨日、射命丸の家が火事になったそうさ。

俺はそんなことをする非情な輩は絶対に許早苗。

絶対に犯人を捕まえて土下座させる。焼き土下座だ。

俺が必ず敵をとってやる。

「大学生さん!! 私のお風呂写真が人里に出回っているそうです!!」

「あんのクソ天狗がアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

!!!!

12・地霊殿に向かっても仲良くしましょう（後書き）

こぼれ話

大学生「そういえば霊夢の賽銭箱って盗まれたの2回目？」

霊夢「悪いかしら」

大学生「セコムしとけ、そろそろ」

13・咲夜さんはPAD?.....どうでしょう

「大学生〜！私だ〜！遊びに来たぜ〜！」

「魔理沙〜！おまえか〜！遊びに来たのか〜？」

と言うわけで今日は珍しい、守矢神社に魔理沙が遊びに来たそう
だ。

ああ、実際に来たんだった。まあ別に誰が来ようと...

「待て、賽銭入れろ」

「断る」

「ヤシマ作戦を決行します」

「入れるぜ」

と言うわけではした金を入れた魔理沙。
ちっ...これっぽちか。

「で？何しに来たんだ？」

「だから遊びに来たって言ってるだろ」

「ふーん、誰と？」

「お前と」

そーなのかー、魔理沙が俺と遊びたいのかー。

.....え？

「またまた〜ご冗談を〜w」

「嫌なのか？」

「喜んで」

と言うわけで魔理沙が箒に乗って、俺はその隣を飛んで人里に向かった。

そういえば人里にはあまり行ってないな。白玉楼にも。いずれ行ってみようカドー。

「お前、人里には行ったことあるのか？」

「早苗がキレて以来全く行ってないな。買出しとかは早苗が専門だし」

「料理は？」

「俺の専売特許だ…いや、あの3人が壊滅的にヘタクソ過ぎるだけだな」

早苗はお饅頭に塩を入れるほど。

諏訪子さんは米で水を洗うほど。

神奈子さんにいたっては放棄だ。

「いや、まさかあれほどヘタクソとはな、あいつらどうやって飯食ってたんだよ」

「お前の帰りが遅いときはいつも出前を頼んでたぞ？よくあんな金があるよな」

へえ、やっぱり出前ですか、確かにここは案外デフレだからな。

一個の金の値打ちが高いんだろう。俺の持ってるこのアルミの1円で結構な値段だからな。

外の世界の1円だからこそ価値があるのかもしれない。

だってこの世界じゃ多分アルミ缶1個で人だかりが出来るほどだからな。

「お前、スチール缶って知ってる？」

「シンジがよく飲んでた奴だろ？たしかUCCミルクコーヒーだったけ？苦かったぜ…」

「シンジ菌患者には珍しくない代物だね、ゴメン」

だが試しに1円玉を道端に放り込んだら人里の人間が集まることは確かだ。

で、ちよつと外の世界の事を知ってる奴が、「これ、1円玉だ」
って言ったら

な、なんだってー！と言わんばかりに取り合いになる。

この世界の1円はすげえ価値のものらしい。

「そういえば、ここって意外にも住みやすい場所なんだな」

「は？何で、自販機もないしカド屋もないし兵装ビルもない、住みにくいぜ」

「お前の基準なんぞ知るか、都会暮らしにはこつというのがいいの」

この魔理沙は誰が憑依しているんだ？と疑うほど何かがおかしい。
えーっと……リアルに現代入りしたパターン？それも第3新東京市？

「それはないよな、自販機もカド屋も第3新東京市のものだけどそれはない」

「お前も第3新東京市から来たのか！仲間だな！」

「……駄目だ……ついていけない俺が居る」

まあこの話は置いておこう。

適当に、「ん……ああ、仲間だな」って言ったら「にひひ」と、
魔理沙が笑った。

いい笑顔だ、だが、第3新東京市の知識は観光案内できるレベル
だがそこまで知らん（主に道）

「ま、それはさておき、とりあえず茶屋にでも行こうではないか」

「そだな、代金はお前持ちな〜お前1万以上は持つてるだろ？」

「外の世界の1万なら持つてるぞ」

「……………なっなんだってー！？」……………」

突然回りの群集が俺に向けて絶叫した。
一体なんだと言った？

「おい！お前少しは自重しろ！幻想郷で言う円は外の世界の円とは違うんだぞ！」

「そうだったのか」

「ったく…10円でも10万ほどの価値はあるんだからなあ…とつとけば良かったぜ」

と言う事は1万円札だと……すげえ価値になるな。
だが一歩間違えたら詐欺師だ。どうしましょ。

「換金しようか」

「質屋なんてないぞ」

「マジか、どうするよ」

「あきらめろ、お前は一文無しだ」

「なん……だと」

U S O D A R O ?

この俺が一文無し？そんな馬鹿な話があるわけない。
俺の財布がすっからかな訳ない。

「魔理沙アアアアアアアアアアアアアアアア！働き手を教えてくれえええー！！！！！」

光速土下座で魔理沙に働き手を求める。

「紅魔館ならバイト募集してるぞ（グリグリ）」

「踏むな踏むな、俺の業界ではご褒美だが、あ、縞パン」

「咲夜が急遽執事を募集してるって…さ！！（グシャッ）」

「ごへっ！？（カシャッ）」

だが今死肉になってしまつては執事になるどころかこの場から立ち直ることすら出来ない。

故に俺は…立つ！！

「よっこいせ。ならば善は急げだ！！言ってくる魔理沙！！」

アムロ！行きまーす！と言わんばかりに人里を出て飛んだ。

確か人里では飛行禁止だったはずだ。その点は忘れちゃいない。

「あ…オイ待つてって！……行っちゃったよ……あー暇だ」

魔理沙？ああ……………捨てた。

紅魔館、執事になる第1条件、美鈴を倒せ

「ゴッドフィンガー」

「zzzzぐはっ！」

クリアした

と言うわけで色々あってやってきた紅魔館。

やはりやたらと広い。何か理由があったはずだけど忘れた。

「で…咲夜さんの執務室は…ここか」

ナイフの形をした表札っぽい奴に『SAKUYA・IZAYOI』と書いてある。

多分ここをノックすればいいんだな。

「だが俺はあえてノックをしない」

問答無用で部屋に入った。

しかしそれが間違이었다

「あ」

まさに着替え中……！お決まりのパターン……！！
PADじゃなかった……生乳………圧倒的生乳………！！

「うん、ナイスおっぱい！」

「……いやあああああああああああああああああああああ
ああ！！！！！！？？？」

ナイフの雨が降ってきた。ククリ、タガー、コンバット、色々な種類だった。

俺はそれを全身全霊で受け止めたのだった。

13・咲夜さんはPAD?.....どうでしょう(後書き)

こぼれ話 エヴァ成分

マヤ「...時間です」

ミサト「作戦開始、かく乱砲撃開始、ポジトロンライフル発射準備
！」

「全VLS、ミサイル発射、第2台3砲台射撃開始」

「ポジトロンライフル発射準備開始、第3変電施設正常稼動」

「第3砲台被弾!第2VLS蒸発!」

「第4砲台射撃開始、戦車隊、撃て!!」

マヤ「上空に、巨大なATフィールド確認!.....2つ...?」

ミサト「何ですって!?!」

リツコ「ま...まさか.....初号機.....?それに...最後のシ者.....

」?

マヤ「識別信号、地上の初号機と全く同じです!」

カヲル「…悲しい歌だね」

シンジ「全くだ、ラミちゃんもまた、悲しい歌を歌う」

カヲル「終わらせよう、碇シンジ君」

シンジ「はいよ」

14・主人公に入っていない能力、それは地雷回避です（前書き）

今日はちょっと短めです。

霧のいいところで終わらせるのもしかりってやつですよ。

14・主人公に入っていない能力、それは地雷回避です

「そう、貴方が執事の希望者？」

「Exactly（その通りでございます）」

タガーナイフ、ククリナイフ、マチェットをケツやら腕やらに刺さっている。

まさかの全被弾とは、俺としたことが…

「……先ほどの件は謝るわ、でも貴方にも非があるのよ、女性の部屋をノックなしで入るなど言語道断。執事の風上にも置けないわね」

「重々承知しております」

と言うわけで何とか面接には合格した。

だが、名前の欄で引っかけた。

住所、年齢、職業などは一応大丈夫だったんだが…

名前が……

「いい加減本名を教えなさい!!」

「ないんだっての…」

「次は服装ね、メイド以外にも執事服があるのだけれど……このサイズで合ってるかしら？」

そう言って咲夜さんがクローゼットから取り出したものは、タキシードとネクタイ。

れっきとした紳士じみた服だ。まあごく普通の執事服というものだよ。

「ふむ……少し着てみるとしよう」

その場で着替えようとしたら動脈にナイフを突きつけられた。仕方なしに更衣室で着替えてきた。着る事自体は制服で慣れたのだ。

だが…ネクタイが結べないって言うのが悩みだが。

「まあネクタイなんてスカーフみたいなものだろ。巻いとこ」

ネクタイを巻き、咲夜さんの執務室に戻った。

大体このメイド長は何をやっているんだろうか…

というか妖精メイドは一体何をしているんだろうか。

UNオーエンは彼女なのだろうか。

「まあいいや咲夜さん」

「やり直し」

と言うわけで咲夜さんに結んでもらった。
仕方ないでしょ？高校ではネクタイは被る物と思ってたんだから。

「で…4時には掃除は完了、5時から夕飯の準備、これは大丈夫ね？」

「はい！しっかり投げさせていただきます！」

「お願いね（投げる…？）ああ後、美鈴が寝てたら弾幕なり銃弾なり叩き込んで頂戴」

待て、流石に妖怪でも銃弾喰らったら死ぬだろ。

まあその点はどうでもいいだろう、起こしても寝るだろうし。

「は…はあ」

「返事ははつきり」

「ヘイ大将！！」

「……………」

と言うわけで時間割を貰ってその通りに動けたとさ…

「えー何々…今は1時30分…妹様の遊び相手……………あ、俺死んだわ」

しかし命令に逆らったら金を貰うはおろか、命を払う羽目になる。仕方ない、潔く命を払ってこよう。

と言うわけで…便利な言葉だね、まあと言うわけでフランの部屋にやってきた。

早速ですが…ここヤヴァイ、返り血、返り血、血溜まり…………殺人現場？

「じ…事件は現場で起こってるんじゃない…会議室で起こってるんだ…帰っていいですか？」

だがここで引き下がったら男としてすたる…と言うか咲夜よ、

最初から殺すつもりじゃないのか？

俺が邪魔で邪魔で仕方がなくて、何らかの口実で殺すつもりだったんだろ？

そうだろ？こんな死地に執事を放り込むなんて…悪意しか見えないぞ？

と言うか掃除しろ、何を考えておるのだ妖精メイド。

「ええい！うじうじしてても仕方ない！！……コホン！」

扉をコンコンとノックする。

「い…妹様！」

「…誰？」

か細く、弱弱しい声…これがフランの声か…何か病弱って感じだな。

ってか咲夜、ちゃんと飯食わせてるのか？相当のど渴いてるんじゃない？

「フィロストラトスでございます！」

『嘘だね』

「あ、間違えた、えーっと…姉御から話は聞いていると思うが、執事だ」

『……………新しいおもちゃ「ではないことは確かだな、うん」…まあいいや。入ってよ』

恐る恐る扉を蹴破ると、そこは真っ暗だ。暗視ゴーグルがほしい。激しくほしい。

だが日光を当てたら死ぬだろうな、太陽が当たった夜王みたいな感じになるんだろう。

基本的にはフランが弾幕などの光で明かりをとめているそうだが俺もそれを真似て部屋中に弾幕を貼り付ける。すると、ボウッと明かりがもった。

なるほど、常に真っ暗な部屋、って訳ではないんだな。

「と言うわけで俺が執事。まあ気軽に大学生、とでも呼んでくれ」

「大学生……？」

「そ、大学生」

指をあごに当ててフランが何かを呟いている。

よく聞くと「だいがくせー…だいがくせー…」だと。

ふむ、可愛いと言うのは本当だったようだ。

「強いのか？」

「霊夢を倒した……あゝ」

地雷……踏んだ……

14・主人公に入っていない能力、それは地雷回避です（後書き）

こぼれ話

大学生「2話連続投降を目指してニコ動見てるバカってどーこだ」
フラン「ここー！（ギョッ）」

どかーん

マチユ「つぎゃあああああ！？」

15・EXボスの名前は伊達ではありません。

「つよいの？」

えーっと…言い方は可愛いけど内容が怖い。

あ……ここは否定するべきか…いや、それでも弾幕ごっこは強制開始。

なら逆に過大評価するべきか…いや、それもプライドの高い吸血鬼には無意味。

「ま…まあそれなり…かな？」

「どうして？ 霊夢倒したのに何で弱いのか？」

……ふむ、これはやばい、脳内信号が赤を過剰に照らし続けている。

照らしすぎて何個かのLEDが圧壊してる。

「……いいだろう！ 来たまえ！」

「……っ!？」

俺が覚悟を決めてファイティングポーズを取った瞬間、空気が揺れた。

空間が歪んで、花瓶が割れる。その歪みの中心を見ると…

「ワタシトアソンデ！ダイガクセイ!!！」

赤黒いオーラを身にまとったフランドール・スカーレットが邪悪に微笑んでいた。

その表情は495年ほぼ一人で生きてきた孤独の、鬼だ。

「全力で……………お引き受けしますよ…」

ここで引き下がるようでは、人間として廃るでしょうが。

外の世界の人間。逃げませんよ。

負けじと腰を落として気合を入れる。

「最っっ高にハイって奴だあああああああああ!!！」

体内で何かがはじけ、濃いオレンジ色のオーラが漏れた。

これは何度か見たことがある、霊力だ。

諏訪子さんや加奈子さんと弾幕ごっこをしているときによく見えるものだ。

霊夢や早苗と戦っているときにも若干見えるが色が薄い。

ちなみに霊夢の色はピンク色、早苗は緑色だった。

「靈力……それも凄く強い……」

「先手必勝っ！！！！」

「ぐっ！？」

分析最中に間合いを詰めて、ショルダーアタックをフ란の腹に叩き込む。

「まずは一個被弾。はてさて、避けきれるかな？」

「人間の癖に……生意気なのよ……！」

「人間差別反対」

突然の不意打ちに興奮したフ란が無造作だが半端じゃない威力の弾幕を撃つ。

この程度、神奈子さんのオンバシラに比べたらそうめんみたいなものだ。

「そういえばスペカは使わなくても良かったんだよね、なら……」

指を一本前に出して極細のレーザーをフランに向けてはなつ。

「っ…来る!」

「ほいっ」と

当然フランはそれを避けた。

さすがはEXボス。どんなに細いレーザーでも見逃さないか。ふとフランが後ろを見ると、ベットが融解していた。

「溶かそうとしたってそうは行かないよ」

「あちゃっ…ばれてたか。身ぐるみひん剥いて射命丸に寄付しようと思っただが…」

「面白いね、大学生は。もっと遊ぼうよ!!!」

そう言っつてフランが4人に分裂した、フォーオブアカインドか。大丈夫だ、避けたことはある。

「あなたはもう二度とコンテニユーできないのさ!!!!!!」

「人生何度でもやり直しは効くわあい!!!!!!」

右に弾幕左に弾幕前には弾幕…ならば上!!!!

「あらほいっとなぁ!!!っつて…ヴェーイ!?!」

上から弾幕が落ちてきた。左に避けたが左にも弾幕。被弾した。被弾したらピチューンと行くわけではなく、連鎖して喰らう。

これが現実だ。

「ウヴェツ！？ぐあいつて！！いてえなこのやろっ！！グあっ！！」

最後の一発を綺麗に頂き、床に向かって落ちる途中、フランが接近して来た。

手には、謎めいた物体……目？

「……ぎゅーっとして……どかーんダヨ？」

ぐしゃっ、と不吉な音がした。

「……っ……いてえつての……血が出ちゃった……じゃん……」

俺の胸が……しかも心臓部分が裂けて、血があふれる。たかぶるう

……

しかも痛みでうつぶせに倒れたまま動かない。

と同時に意識も朦朧として、目がかすむ。あれ？ドライアイ？
全くこんなときに。

「なんだ……もう壊れちゃうんだ」

壊れる？ああ、そういえば俺、さっきフランに負けたんだよな。
ああいかにいかに、気をしっかり持て。しかし心臓破裂か。持つて数分だな。

こればかりはまずいな、援軍来ないかな。あ、そうだ、忘れてた。

「とおっ……ところがあ……」

寝転びながら手を見る。左手にかすかに残った霊力……

この霊力が俺の勝敗を決める。と言うかこれが外れたら映姫さんにお世話になる。

それをこっそり地面に引っ付けて、小さな魔法陣を形成する。

「ぎつちよん！……！！！！！！」

力を入れると、一本の線がフランの足の間をくぐり、ある場所へと向かう。

そこは融解したベッドの下だった部分、さっきの極細レーザーの着弾地点だ。

わずかな光がともっている、いわば分離されたレーザーの発射口だ。

そこにレーザーのエネルギー源となる霊力を注ぎ込むと、簡単なレーザーの砲台が出来上がる。それも素体がマスタースパークだったら。

まあフランなら一撃で倒せるだろう。威力は劣るが。

「な……」

「やつ……たね……たえ……ちゃん……策に……ひっかった……よ……」

フランの背中にレーザーが直撃した。

「執事になって1時間もたっていないのにね……というかさ……」
「う……ぐ………え……？」

よっこらせ、と立ち上がった。

「意外と無事だった件について」
「うそ………」

瓦礫から這い出てきたフランが驚愕の声を上げる。

恐らく殺したはずの人物が生きてたことに驚いているんだろう。
まあ俺もなんで生きてるかよく分からん。

「まあ形はどうであれ、俺の勝ちだな」

「うん……」

「あ、言い忘れてたけど敗者は勝者の言うことを聞くんだぞ？」

「えっ……うん」

負けたフランは意外にも大人しい。負けを認められる奴には育つ
てるようだ。

これも霊夢と魔理沙の努力の賜物って奴かな？恐らく。

「まあこれは霊夢にも言われたと思うが、と言つかさつき破るつと
してたのかもしれないが」

ひとっつ！『むやみやたらに何でもかんでも壊そうとしない！』

な」

心臓をぶっ壊されたときの恐怖感は…どんなMでもトラウマになるでしょうね。

うん、流石の俺もあれは死ぬかと思った。やっぱ幻想郷半端じゃない。

後俺の回復力が蓬莱人並なのが気になる。

「…うん」

「ふたーっつ！『掃除しろ！』主に部屋の外！血まみれで汚い！女の子が住む環境じゃない！」

あの廊下、要請メイドも近づいてこないのはまあ気持ちは分らないでもないが

最早殺人現場と言っても過言ではない。いや、昔は殺人どころか虐殺だったらしいが。

「みいーっつ！『レミリアと仲良くしなさい』家族でしょ！仲良くしなさい！！！」

まあお堅いことはこれで終わりとして、人間でも出来る遊びをしようジャマイカ」

「……うん！分かった！」

俺がそういうと、にぱーっと笑って俺に抱きついてきた。

勝負をした後の人間とは仲良くなる。まるでチンピラの喧嘩だ。

「でも…ずるいけど本当に強いのか？大学生って」

一緒に菓子を食べながら雑談をしているとちよこんと俺の膝に座ってたフランがたずねる。

「力押し、魔理沙と同じだ」

「ふーん…ん？何してんの？」

「いや、ちよつと時間の確認を…」

ふとポケットの中のビスケット…のカスに埋もれた懐中時計を見る。

ろ…六時……5時には飯を作らなければ…いけなかった

「うわああああああああああああああああ！！！！（シンジ発狂状態）」

「あ…大学生！！まってよー！！」

おちおち休んでも居られんわ畜生！！！！

15・EXボスの名前は伊達ではありません。(後書き)

こぼれ話

美鈴「……………んんゝ…眠い…………くゝ」

大学「ちよいさー!!!!」

美鈴「ふぎゅっ!!」

これも執事の仕事です。

16・年を越すにもそれを超すための試練が必要です

とりあえず急いで作った一品が意外にもレミリアに好評だった。ちなみに血の件は料理する前に着替えたからばれなかった。だが心身ともに限界だ。

「……………中々いけるわね」

「きよ…恐縮でござえやす、お嬢様……………」

「もう下がっていいわ、顔色悪いじゃない」

「いつもの事だよ…だ……………ふ…らんど…る……………」

よたよたとした足取りで、レミリアの部屋から出た。

これで大半の作業が終わっただろう。だがレミリアが外出しないとは限らない。

それに門番の監視、恐らく今日は寝ないと言うプランを練っているのだろう。咲夜さんは

「……………」

『お疲れね、大学生君。きついでしょ？』

俺の目の前に突然現れた咲夜さん。

その顔はいつもと変わらず、微笑んだ顔だ。

「アンタ化け物だな…流石の俺もきついっすわ」

「当然よ、私が貴方に課した仕事は普通の妖精メイドのすべき仕事の20倍と、

少々気のふれられた妹様の遊びと言う、特別な仕事を加えた特別な仕事なのだから」

なん…だと？確かに妖精メイド全員分の服＋咲夜さんの服＋吸血鬼の服＋美鈴の服を洗濯とか

1時間で全ての窓を拭くとか、フランと遊ぶとか、何かがおかしいと思っただ。

「それをフラフラになりながらもこなす、感心ね」

「お前…俺が来ずに他の奴が来てたらどうなってたんですかいな」

「もれなく妹様の御夕食となっていたでしょう、血が足りないと言っただから」

やべえ、紅魔館マジやべえ…ってかこれって勧誘殺人じゃない？

こんなバイトの募集で大丈夫か？まあ悔やんでもしょうがない。次の仕事だ。

「で？次の仕事は？」

半ば絶望に浸りながらも咲夜さんに次の仕事を尋ねる。

すると咲夜さんが微笑んで、俺の肩に手を置く。

「今日は終わりよ、と言うより、執事の仕事はもううんざりでしょう？」

「言っちゃえば」

「なら、これが退職金よ」

そう言っただけで咲夜さんがポケットから財布を取り出した。

なんだ、ポケットマネーか…と思ったら俺の手の平にその財布を置いて握らせた。

「えっ」

「外の世界の人間は働くだけの機械だと思ったけど、違ったようね」

「ひいゝふうゝみいゝよおゝ……このゝつ……90枚の札束だと……」

「90円ほど入ってるわ」

90円＝90万円と計算すると……この小銭は多分1000円……これは100円……

おいおい……90万4500円ですと？

「なな……こんな大金……いいんですかいな?!」

「いいのよ、ボソツ（余るほどあるし）」

「?」

「いいゝやつはああ!!!!っしゃああ!!文無し卒業どころかお釣りが出るぜええい!!」

何年ぶりだろうこのうれしさ。久々に本気でガッツポーズした。

「ついに偽りの温もりではなく本当の財布の温もりに会ったぜええい……!!!」

ひいひいひいっはああああああああああああああああああ

!!!!!!

……とちよつと待てよ……俺フランとまた遊ぶって約束したんだよな……」

このまま俺が帰ると、まあ自惚れじゃないが寂しがらるだろう。

そしてまた人間のもろさを忘れて血が足りないともうす。

すると下手したら暴れだして紅魔館を破壊。

人里に向かって皆殺し……BAD END!

「咲夜さん」

「何かしら?」

「また来ます」

「え？」

「フランは俺に任せろー（バリバリ）」

「やめて！」

時は進んで師走の終わり。簡単に言えば12月30日。

俺は再び紅魔館にやってきた。レミリアから許可は貰っているし、咲夜さんとも仲がいい。

人間類で紅魔館のフリーパスを持っているのは霊夢と俺だけだそうだ。（美鈴談）

「フラン〜！久しぶりだなあ〜よしよし」

「えへへ…待ってたんだよ。大きく〜ん」

まず最初にやってきたのは綺麗に掃除された地下の廊下。

俺がフランの部屋に行く前にフランが笑顔で受け入れてくれた。

「山の巫女？」

「知らないのか？」

「うん、ここ最近新聞すら読んでないから」

新聞すら読んだことないのか。

それは忌々しき緊急事態だ。

と、冗談交じりにあることないこと全て話した。

「へー！お外って面白そうだね！！」

「外は実にいいところだ。」

いずれお前も外のマナーが全て理解できるようになったら一緒に
行こうな」

「うん！私も頑張るよ！」

「よしよし…おっと。話しすぎた様だな。俺はそろそろ帰るが、ま
た遊びに来てやるよ」

ちよつと寂しそうな顔をしたが、すぐに笑顔に戻った。

「またね」

「じゃあの」

「あ、そうだ。帰りにお姉さまが部屋に来て…」

あれ？大くーん！このままだとお姉さま待ちぼうけだよー！」

なにやらフランの声が聞こえるが、多分咲夜さんと呼んでいるん
だろう。

俺には関係ない俺には関係ない。

守矢神社

「たっだいま」

「お帰り〜ちようどよかった。大学生、ちょっと年越しソバの小麦粉かって来てくれないか？」

家に帰ると、正月に食うであろうおせち料理の器を洗っていた早苗と

神力を高めている諏訪子さん、そして年越しソバの器を探していた神奈子さんが俺に頼んだ。

「え？いいけど」

「悪いね」

「最近やつとともに飛べるようになってきたんだ」

「そうかい、それはよかった（戦闘時は戦闘機並みにビュンビュン飛んでたけど）」

ふわりと妖怪の山を降り、人里に降り立った。

「……………」

「……………」

「お…お二人さん、落ち着いて」

粉屋で俺ともう一人の少女がにらみ合っている。

どちらも小麦粉目当てだ。

「どけ、それは俺の年越しそば用の小麦粉だ、俺の脳内アマゾンで予約していたんだ」

「いいえ、ここは後に引けません。この小麦粉は私たちのものです」
「お前には半霊と言う名の立派な練り物があるではないか」

「半霊は練り物じゃありません！！！！私の体をそばにされてたまる
ものですか！！」

そう、半人半霊、魂魄妖夢だった。

「ならば力ずくで奪い取るのみ！！霧の湖で決着をつけようぞ！」

「いいんですか？私結構強いですよ？」

互いに霊力をむき出しにしながら霧の湖へと向かった。
さすが半霊、霊力を出すのはやぶさかじゃないんだな。

「こつりや大変なことになってきたぞお……里の皆も呼ぶか」

粉屋のオッサンは上白沢慧音と里の皆を呼んだ。

その中には霧雨魔理沙や居合わせた博麗霊夢も観戦者となった。

と言うわけで瘴気のない霧の湖へと向かった。

縄張り関係はチルノに許可を貰って何とかなった。

ちなみにどうやってきたかはよく分からんが里の一部の有力者は観戦に来ている。

見たところ、有名な奴と言えば、藤原妹紅、鈴仙・優曇華院・イナバ。

博麗霊夢、霧雨魔理沙、上白沢慧音先生などなど。

人気のないところにはさらに凶暴な妖怪も来ている。

風見幽香やルーミアだ。怖い怖い。と言うか俺ってそんなに有名だったの？

「いいか？スペカは3枚。それ以外は何でもありだ」

「分かりました。今年も無事に年を越えるために……」

腰を落として刀に手を置く妖夢。心なしかその周りが暗くなり、

桜の花びらが見える。

中々、華奢な女だ。

「行くぞお！……弾幕ファイトおおおおお！……レディイイイ
イツ！……！」

同じように腰を落とすが、美しさとは裏腹に豪快さをイメージしている。

どういった原理なのかは謎だが、地面をえぐり、周りに突風を吹かせる。

「…いきます!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
「!!!!!!」

刀を居合いのようにして俺の間合いを詰めようとする。

それと同時に俺も殴る気まんまんて妖夢に殴りかかった。

「あまああああい!!!!!!」
「ぐあっ!!!!!!」

だがリーチで勝る刀、だが手数と汎用では拳の方が上だ。

刀を抜く前に妖夢の頬に拳を入れ、その衝撃で短刀を落とさせる。

しゃらららつと音を立てて俺の足元に刀が置かれる。

白楼剣…迷いを断ち切る短刀ね。

「一本いただこう」

「ぐっ……後で返してくださいね……！」

「無論そのつもりさ。だが小麦粉は渡さん」

白楼剣を右手に持つて軽く振る。

心なしか心がすつきりする。

「佐竹メルヘン一刀流……なめてもらっちゃ困る」

「そんな流派があつたらぜひ知りたいです」

「全ては心の中だ、今はそれでいい」

と言うわけで正式な戦いが始まった。

「はっ……どりゃっ……さらあ……しね……あ、折れた」

ただ単にずっと縦に振り続けていたら刀が折れた。

幻想郷で近接武器はあまり通用しないんですね。分かります。

「っ！今っ……！」

「真剣白羽取り……！」

「なっ……！」

う…腕がなければ即死だった。
幽霊10匹分の殺傷力って…基準がよく分かんが凄いんだろ？
とりあえず蹴りで距離をとる。

「あぶねーあぶねー……」

「じ…地味に痛い……」

「っとまあ…そろそろスペカを使うか」

「同感です、お互い長期戦はきついでしょう（晩飯の準備的に考えて）」

と言うわけで互いに1枚スペルカードを用意する。
双方速攻を配慮したカードだろう。
と、想像しながら同時に叫ぶ。

「『人鬼 未来永劫斬』」

「『心壁 ATフィールド』」

妖夢が一気に間合いを詰める。だがこちらら心の壁。
絶対恐怖領域に近づけるはずもなく跳ね飛ばされた。

「ぐあ…！！！？」

跳ね飛ばされ、気に頭を強打した妖夢は低い声を上げて、そのまま意識を失った。

その倒れた妖夢をおんぶして、

「はい、おーしまい。おやっさん。小麦粉プリーズ」

「お…へ…へい」

もらえるものは貰った。

大晦日、妖夢は自らの身を削って蕎麦を作ったそう。
しかし流石に幽々子様に止められたらしい。

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。

「うまいな。さすが俺の投擲蕎麦だ」

「おいしいです！投げた衝撃で何故かコシが出てる！！」

「これは美味しいね、諏訪子の本体も満足しているようだね」
「本体言うな！！」

投擲年越し蕎麦を食べて、一年の終わりを迎えたらしい。
ごーんとな。

16・年を越すにもそれを超すための試練が必要です（後書き）

こぼれ話

大学生「他の小説の出来とこっちの小説の出来を比べたときの差は何だ？」

マチュ「だからこっちも出来る限りシリアスに仕上げようと頑張ってたんだよ」

大学生「中途半端なシリアスほどつまらんものはない」

マチュ「ならもうギャグ1本で行ってやるよ!!」

と言うわけで次話はシリアスなど一つもなしでバトルもなしで行きます。

17・新年は大人しく迎えましょう（前書き）

10月に書くネタじゃないorz

17・新年は大人しく迎えましょう

「新年明けたな」

「初詣来ますかね？」

と、新年が始まった幻想郷。高校受験の人はもうお守り買ったかな？

買っていないなら守矢神社においで、安産御守あげるから。ちなみに2柱さん方は寝ている。誰が5時起きだつて？

「そういうわけだ……来たぞ、誰か」

「むやみやたらに賽銭をせびらない様にしてくださいね」

「了解です、早苗中尉」

まだ外は暗いというのに誰かが来たようだ。

霊夢かな？あいつも客の来ない初詣で忙しいはずだが…

じゃあ魔理沙か？いや、あいつが初詣に来るわけがない。と言うかどつちかと言うと霊夢側だ。

ふむ、この程よい西洋風の妖気……

「ほう、こりゃ珍しい」

参道に降りてきたのは、レミリア・スカーレットだった。

初詣らしく、和服を着ておまいりに来たようだ。

射命丸エ…こういうときに限ってカメラを持ってこない。

「太陽が昇る前に来ないと初詣なんて出来ないから。咲夜もつれてきたわよ」

今度は白を主体とした和服でふわりんこと地面に降り立ったのは
まあいわずと知れた鬼畜メイド、十六夜咲夜だ。俺を酷使したこ
と忘れんからな。

お金はありがたく貰うけど… 金金♪

「朝早くからご苦労様です、東風谷様、大学生様」

咲夜さんの相変わらず丁寧な挨拶。

しかしこの挨拶に見とれて執事になったら…

まあ簡単に言えば俺は地雷原を4WDで通ったってことだな。

「まったく……まあいいや。参拝したいなら早くしろ、でなければ帰
れ！」

「「やります！私が拝みます！！」」

と、言わんばかりに2人は小銭を入れ、パンパン

と拝まずに跪いて手を組む。

なんだこのメルヘンティックな参拝客…

「おいwお前ら何やってんだw」

「何って…拝んでるのよ」

「バーローww仏教と外国宗教混ぜるなよww」

まあいいや、賽銭が手に入ったらそれでいい。

「で？なんたつてお前らこんな辺境で田舎っぺーところに来たんだ？」

「てめえ表出るコラ」

後ろで神がとんでもない殺意を抱いた表情でこっちを睨みつけていた。

が、俺はそれを全く気にしない。後早苗、ここは表だ。

「別に、ただ初詣に行くなら神が居る場所じゃないと意味がないと思っただからよ」

「あつそ、終わったから帰るのか？」

「それ以上ここに居る理由はないから、咲夜、行くわよ」

「はい、仰せのままに」

嵐のように過ぎ去っていった2人。

残ったのは風で飛んできた枯葉のみだった。

「……え？参拝客これだけ？」

その後、人里の一般人たちが参拝に来た。

結構な多さだから3神はまんざらでもない様子だ。

「大学生もよくやるな、普通逃げ出すぞ。こんな仕打ち」

やはりこういうときに俺を純粹にほめてくれるのは神奈子さんだけである。

早苗と諏訪子は何故か賽銭箱の前で一般人と雑談をしている。

俺？雑務でこの寒空の中洗濯ですが何か。

だが加奈子さんは俺を気遣って井戸の前に来てくれた。

「へへっ、やっぱいい人だな。神奈子さんは」

「え…あ…ありがと」

「しつかしまあ…外の世界の井戸はどこまで冷たいんだか…霜焼けちまった」

石鹸から手を出し、手の甲を見ると、真っ赤に焼けて物凄くかゆい。

霜焼けは本当にきついんだぞ、なめたらいかんぜよ。

「早苗も悪気があるわけじゃないんだけどねえ…あ、大学生。お湯持って来ようか？」

「いや、これも肉体の鍛錬よ。人間ならこれを頭から被るのが人間つてものだ」

「え？」

神奈子さんの驚きの声を無視して上着を脱ぎ捨てる。

腹筋などしたことがない筋肉のない体が露になる。

「うむ、わが家族は女子ばかりだが、お前も女子であつたか」

所変わって慧音亭。

何故か自殺行為を図った俺は、ここで意識が戻った。

「何でアスカとレミリアが居るんだアツー！！！！！」

はあ…酷い夢を見た。何で咲夜さんがミサトさんに誤射されてるんだよ。意味わかんねえよ。

とまあ冗談はこのくらいにして、ここはどこだ。と考えていると、襖が開いた。

そこにはバカを見る目でこっちを見ている霊夢と、同じくバカを見る目でこっちを見る魔理沙。

そしてその後ろには患者を見る目でこっちを見る、腕を上下に振りたくなる人物

八意永琳がいた。

「調子はどうかしら？」

えーりんが軽い問診をする。

「寒い、かゆい、しびれる」

「結構」

わずか6秒で終わった。

純粹に寒い、霜焼けでかゆい、寒さで麻痺してしびれる。

この3つ、そして

「ぶえつくしゃあらっせええい！……！！！」

「あと風邪ね」

さっきの寒さと、こっちに来るまでに着替えなかったせいか風邪を引いた。

新年早々風邪とは、馬鹿だな俺は。

「バカは風邪引かない、っていうけど、都市伝説だったみたいね」
「どうやらそのようだぜ」

あとそこの主人公2人、後で覚えとけ。

17・新年は大人しく迎えましょう（後書き）

こぼれ話

咲夜「豊胸がしたいです」

永琳「いいけど、爆発するかもしれないわよ」

咲夜「他を当たります」

咲夜「豊胸がしたいです」

ドラ「ほっきょうぱっど〜！」

咲夜「PADはいりません」

咲夜「豊胸がしたいです」

大学生「俺でよければ力になろう（もみもみ）」

咲夜「んあ……はあ……って！！違う！！！！（グサツ）」

大学生「いてっ」

咲夜「豊胸がしたいです」

シンジ「そうか！」

アスカ「熱膨張！！！」
咲夜「他を当たります」

18・看病はちゃんとしましょう（前書き）

だが風邪をひいたのは大学生ではない。

18・看病はちゃんとしましょう

昨日の敵は明日の味方、と言うが逆に考えろ、今日の味方は明日の敵、かも知れんぞ？

と言うわけで大学生です。新年早々風邪を引きました。今年が心配です。

しかし相変わらずの回復力、3時間寝たら治った。

「……あー…寒い寒い…」

1月の中旬の夜中、吹雪のような寒さの中俺は永遠亭を目指して雪の積もった迷いの竹林をざくざくと歩いている。

当然意味もなくこんなところを歩くような頭のイカレた真似はしない。

れつきとした理由があつてこんなところに来ているのだ。

まあその理由を語るとなると、6時間以上は要することになる。
回想を用いて今の状況を説明しようジャマイカ。

*

「……………うゝ……………」

時は夜7時ごろにさかのぼる。
晩飯を食べて、風呂にも入った後のことだ。

「おーい、早苗ゝ風呂開いてるけど閉めていいか？」

「……………ああゝ……駄目……」

「ん？どした？」

「風邪を引いちゃったみたいです…今日はお風呂パスします……………」

そのときは「何打風邪か、神の癖に風邪ひくんだな」と茶化した。
別に誰が風邪をひいて死のうがどうでもいい、いや、死んだら流
石に他人事ではなくなるが。

早苗が風邪をひこうと、

霊夢がレイ夢になろうと、

魔理沙がマリ沙になろうがどうでもいいのと同じ。

と、寝室で先に寝ている諏訪子さんの隣で布団を敷いて寝た。

「かにゃゝ……」

最近、諏訪子の寝言に少し悩んでいるが、そんなことは気にしない。

んで、問題はその夜中の話なんだよ。

突然、部屋の中で誰かのうめき声が聞こえて…

「う…うう…う…う…」

なんか変だな…って思いながらじつと我慢して寝てたんだよ。
ここで起きたら何か変に思われるだろうし。
で、そのまま数分くらいたったかな、そしたら次はね

「大学生…大学生さん…… ねえ起きて… 大学生さん……」

あからさまに苦しそうな声でおれの体をゆするんだよ。
そりゃもう、怖かったなあ… なんか妙にその人の手が熱かったし。
これで起きたら確実に殺される、って思ってもう藁にもすがる思いで布団にしがみついたんだ。

「あ…あ… もう駄目… 頭がポーツと…… あうう……」

そしたら腹に重みを感じたんだよ。

「うぉあああああああ！?!?」

「ひゃうつ!?!?」

流石に耐えられなくなって叫んでその重みの元凶を跳ね飛ばしたんだ。

その音に諏訪子さんと神奈子さんが飛び起きた。

「早苗!?!?どうしたんだい!?!?」

「早苗!?!?これは凄い熱だ!?!?」

「お化けがっ!?!?お化けが俺の!?!?何だ早苗だったのか!?!?」
「うぉ!?!?なんだ?顔が赤いぞ!?!?発情期か!?!?」

霊弾照明をつけると、そこには下着姿で顔を真っ赤にして息を荒げている早苗が居た。

「諏訪子様…神奈子様…大学生さん…はぁ…私…熱があるみたいで
す…う」

「「「うん、知ってる」」」

「……………」

＊

で、どういうわけか、俺が永遠亭にいつて薬を貰うことになった。

「どの辺に俺が行くような要素があつたのかは謎だが…」

本当に俺が居なかった原作、こいつらはどうやって生活をしてきたのだろうか。

少し気になる、と言うかこれ、結構診察費……あれ？患者はどうしようか…

とかどうとか考えていると、着いた。

どうしようか、適当に薬をもらうか（早苗爆発覚悟で）

それとも適当に症状を言つて帰るか（早苗副作用覚悟で）

それか早苗を連れて行くために戻るか（早苗悪化覚悟で）

「まあいいか、寒いし、後で考えよう」

ノックをせずに入った。

「どうも、夜遅くにすみませ〜ん。守矢神社の大学生ですけど〜」

真っ暗だ。とりあえず靈気で目の前の明かりをともし、靴を脱いで廊下を進む。

「永琳さ〜ん、イナバさ〜ん……あり？寝てるのか？」

返事がない、ただの廊下のような。

しかし廊下の立て札とかを見る限り、ここが永遠亭であることは間違いないようだ。

「……………」

誰も居ないのか？

覚悟を決めて私室であろう部屋を空ける。

「し……しつれーしまーす……」

「へ？だ…誰？」

「あ、輝夜さんでしたか」

今まさに寝ようとしていた蓬萊山輝夜さんが部屋にいた。

これは都合がいい。ちよつと永琳さんの居場所を聞こうではないか。

「あの、永琳さんをお呼びしていただけるとありがたいのですが」
「永琳なら守矢神社に行ったわよ、二柱に借り出されたみたい」

なん…だと？

「……………輝夜さん」

「何？」

「俺…死んでいいかな…？」

「面倒だからやめて」

泣く泣く守矢神社に帰還した。

今までこのような屈辱があっただろうか…

泣いていい？ねえ泣いていい？いやもう泣いてる。

守矢神社

「いやゝ助かったよ永琳、大学生は災難だったけどね」

「そう思ってるんなら通報するなよこの諏訪子」

通報を提案した張本人は、この洩矢諏訪子であった。
早苗が苦しそうにしていたと心配になったそうだ。
できれば俺も心配してほしかったな

軽く別居しようかと考えていると、部屋から永琳が出てきた。
何故かポケットから斬艦刀のような大きな物体がはみ出ているが
…まあなんでもない。
だがあからさまに巨大な注射器。それだけは見逃せない。何か深
緑の液体入ってるし。

「永琳さん！どうでしたか？早苗は大丈夫ですか（そんなでかい注射器で刺されて）」
「特に重い病氣ってわけではないけど、今は安静にしておいたほうがいいわね」

寝ぼけ目をこすりながら永琳が簡単に症状を説明する。
まあ行ってしまうえば風邪をこじらせて重症化しただけらしい。

治療費を払って内服薬を貰う。注意書きには分量を守らないと爆発する。

と書いてある以外は安全だ。これならまだマシか。

「今日はうどんげが彼女の面倒を見てくれるから、貴方達は休んでいていいわよ。お大事に」

「ありがとうね」

「治療感謝するぞ」

「じゃあ～」

永琳が先に帰って行った。そうか、今日はうどんげが泊まるのか。流石に一人じゃ寂しいだろうな。俺も行くか。主に俺が寂しいけど。

「……………体温はまだ高いか……………おす。オラ大学生」何？」

俺が部屋に入ると、そこにはブレザー姿のバニーガール。外の世界でこんな奴がいたらドン引きか連行されるかギリギリのところ立っている。

そうです、彼女が…鈴仙・優曇華院・イナバです。決して千葉口ツテの選手ではありません。

「いや、まあちょっと早苗が気になってな……………よっこいせ……………」

それとうどんげにも用がある。

なんだっけ？うどんげは月のウサギだったはず。

俺がシンジだと言う証拠が得られるかもしれない。

ゆかりんが言う言葉も間違いではないはずだが、どうも真偽はわからない。

そこで、幻想郷とエヴァの世界を繋ぐ共通点である、『月』

「渚カヲルとかいたら凄いなだけだな……」

「月の民の第1号がどうかしたの？」

「（；。A）」

18・看病はちゃんとしましょう（後書き）

こぼれ話

さとり「こ…こないでえええ！！！！」

大学生「ちよっちよっと待ってよさとりさん！

『さとりんかわいいよさとりんさとりんさとりんさとりん
俺もうちの子が傍にいたらロリコンでもなんでもいいや
あーもうこの怯えた表情もたまらない！かわえええ！！』」

19・自らが人の代わりをする時は、それに応じた実力が必要です

「月の民1号ってカヲル君が？」

ジト目になりながら鈴仙に聞き返す。

「カヲル…って確かアダムの事よね？お師匠様が言ってたけど」
「へ？カヲル君はタブリスだろ」

先ほど聞いた台詞、カヲルは月の民第1号。
つまり…地球が完成する前から使徒は存在してたのか？
いや、カヲルはゼーレの手によって人の体を手に入れたアダム。
つまり鈴仙が言っているのはアダムの事だろうか…？

「…なんかややこしくなってきた、まあその点は気にしないでおこつ」

「…でもなんであんたがアダムの事を知ってるのよ」
「ほんの成り行き、原作知識というものさ」

もつとも、カヲル君や霊夢とかが実在するとは信じてなかったが。
まあ…いいや！

あ、でも死んでもカヲル君とは会いたくないと何故か第六感が伝えている。

「で…どう？早苗の様子は」

「今は結構落ち着いてるみたいね、と言っても発熱と咳は止まっていないようだけど」

「あー……やっぱそうなっちゃうか…殴ったら治るかフツ!？」

と呟いた瞬間、鈴仙の肘打ちが炸裂した。

冗談が通じない人間は悲しいね。

「何をする！？貴様！！大学生に向かって何をするか！！！」

涙目になって、そしてなおかつ頬を抑えながら怒鳴る。

今の行為はどうフォロ―しても女の子のやることではないぞ！！

「うるさい、病人を殴るな」

「だあからって肘打ちをする医者がどこの世界にいる！！あ！ここにいたか！！！」

「うるさい、患者が起きるでしょ…」

と、ふと2人見ると、その視線に気付いたのか早苗が薄く目を開いた。

ここまで弱った早苗は始めてみたな…。

「あれ…まだ起きてたんですか…2人とも…」

「ああ、駄目ですよ。もう少し安静にしてください…」

おい、何で俺のときはタメ口で早苗の時は敬語なんだよ。

おかしいですよウドンゲさん！！！！

だが、その安静の指示に逆らって「お茶を出さないと」と早苗は起き上がろうとする。

どこまで律儀なんだ。

「早苗、んゝまあ…不健康極まりない俺が言うのもなんだが…その、無理はするでない」

起き上がろうとする早苗の背中を押さえて、ゆっくりと布団に戻す。

病人に茶を注がせるほど俺は外道ではない。

「大学生さん…」

「まあ、病気のときくらいは休めや、お前は最近無理をしすぎだぞ、心のケアも大事だ。」

俺なんかスクールカウンセラーの常連と言われるほど心のケアをしてたんだぞ？」

「なら、私は休んでもいいんですね…？」

「おう、いつも世話になってるからな。男の礼儀だ。借りは返す」

そついうと、笑顔が戻った早苗がぼつと何かを話し始める。

「…………綾波さんも同じことを言われたことがあるって…言ってみましたよ」

「ん？綾波が？」

茶を注儀に以降とした足を止め、鈴仙と俺は耳を傾ける。

綾波つて、多分レイの事だろう。少し聞くか。

「男の礼儀、借りは返す。って言うってお姫様抱っこされたらしいです。シンジさんって人に」

「…やさしいのね、その人」

「…（シンジつてそんなにキザな男だったか？）あのヘタレボウズが？」

多分そのシンジは憑依シンジだろう。

綾波を抱っこできる奴…相当心を開かせたな。

「ええ、男らしい人でしたよ」

「…そうか。お前も色々経験してるんだな」

「ええ…もう一度…もう一度だけ…」

シンジさんに会えたらな…って思うこともしばしばありますよ…」

そのときの早苗の顔は、懐かしい友人の話をしている一人の少女の姿だった。

あながちただの精神異常者のたわごとではないような気がした。

まあ俺には関係ないが。

「まあ早苗、お前の話を聞いて思ったんだが……」

「？」

「なりふり構わずに抱きつくのはやめたほうがいいぞ、例えシンジやカヲルがいたとしても」

「重々反省しています…」

まあそんなこんなで、お茶を注いで来た。

ちなみに鈴仙の分もお茶を注ぐ。鈴仙が「あ、どうも」と茶を受け取り、すする。

「コラ鈴仙・優曇華院・イナバ、何故顔をしかめるか!！」

「……茶柱が尋常じゃないくらい立ってるんだけど」

鈴仙のコップには茶柱が少なくとも20本をゆうに越した量の茶柱が立っている。

まあ多いことに越したことはないだろう。だって俺が入れたんだし。

「エクспанデッド・チャバシラだ、幸せを欲しているだろ? お前は」

「いやそこまで幸せ望んでないから」

と、文句を言いながらもしぶしぶ茶を飲む俺と早苗と鈴仙。

まあその後は退屈この上なかったが、だいぶ早苗の様態は安定していたようだ。

朝、晴れた日は陽気、雨の日は憂鬱。

しかし朝は毎日来るもの。新しい日の始まり。人の心は日によって変わる。

―それは、まああれだ。晴れた日でも憂鬱になるときはあること。

「オイ諏訪子、今なんと言った？」

突然の宣告に俺は意味が分からず声を低くして言う。

「だあーかあーらあー、早苗が風邪で休みの間、大学生が守矢神社の神主をやるってこと！」

「だが俺は居候だ、神主になるような男でもないし、何時までもここににいるわけじゃないぞ？」

それに対して諏訪子は両手を広げながら大きな声で説明をする。
神主とな？その神主と言うのは、あの打法の事だよな？神主打法だよな？

大体巫女や神主つてのは生まれつきでなるものじゃないのか？
そんなに進んで神主になれるほど神の存在ってどうでもいい存在なのだろうか。

というか寒い、いいからこのわけの分からんデザインの神主服を脱がせい。

「どうせ早苗は明日には治ってるんだから、別にいいだろう？
大体3時間で風邪を治す化け物をただの大学生と呼ぶバカがどこにいるのだ」

神奈子さんが俺の肩を叩いて「それに結構似合ってるぞ」と付け加える。

だが加奈子さん。だからって俺を神主にする必要はないだろうに

「うーむ……諏訪子さん、神奈子さん。俺でいいのか？」

「もちろん」

だとさ、信用されてるなあ…俺は。

いや、俺だからこそかな？（加持リョウジ風）

「よし、分かった。早苗が治るまで、役不足だろうが俺がやってやる」

「……と言ってみただけ、大学生はどこまで力を持っているんだい？」

首をかしげながら諏訪子さんが俺に尋ねる。

確かに自分自身の力どころか、自分がどんな能力を持っているかも分からない。

生憎自分の能力を知る方法は俺にはわからない。

「…シラネ」

「知らないか…神奈子知ってる？」

その質問に神奈子さんもうーん…と唸って俺の頭を触って何かを診断する。

神はこれで色々と能力や霊力、妖力などの容量を調べる。…って早苗が言ってた。

すると俺の体からオレンジ色の何かが湧き出て、神奈子さんの手に収まる。

それをつんつんと触りながら神奈子さんは首をかしげる。

「私もよく分からない、なにやらこの力は結界に近い物を感じる。この結界に近いものは私も、人間も妖怪も持っているものだが…大学生はこれがかなり大きいものとなっているそうだな。

結果的にこの結界が妖力や霊力を生み出すジェネレーターとなっている。

と、私は推測するな」

神奈子さんがその結界に近いものを俺の体に戻した。

「つまり、神奈子の言う大学生の妖力と霊力の容量は簡単に言うところ？」

「S2機関」

「なるほどね」

なにそれすごい。

19・自らが人の代わりをする時は、それに応じた実力が必要です（後書き）

こぼれ話

シンジ「おう、久しぶり。ちょっと物申しに来た」

マチュ「はあ」

シンジ「ちょっと小説の評価を見せなさい」

・・・・・・・・・・・・・・・・

シンジ「……何だこの低落は、前作の勢いはどうした？」

マチュ「滅相もない。だがネタがないんだ！」

シンジ「大体！ノープランで書こうとしたのが駄目なんだよ！

え？前作はよかったじゃん！おかげさまで300万PVだよ！？

お前の小説の質は景気変動のように変化するのか

！？」

マチュ「読者様には感謝してるよ！！でも出来ないんだ！！

あの時の感覚が取り戻せないんだよ！！！！」

シンジ「はあ……もうちょっと他の方の書き方も見るよ……

ただし盗作は禁止な。」

と言うわけで、ちょっと勉強します。

20・看病する際は衛生上に注意し、消化にいい食べ物を渡しましょう（前書き）

今日はただ単に看病する話。

20・看病する際は衛生上に注意し、消化にいい食べ物を渡しましょう

「まあ妖力云々はどうでもいいでしょうか…さて、俺はこれからどうしようかの」

神主といえども色々な仕事がある。

結婚式、お宮参り、お祓い。そのほか色々だ。

だがここは幻想郷。常識にとらわれることはない。

じゃあ神主っていったいなにをするのさ。

巫女である博麗霊夢は異変が起きたらそれを解決する。いわば自衛隊のようなものだ。

対してこっちの巫女、東風谷早苗。こいつは進行を得るため。いわばセールスマンだ。

「覚悟も信念も違う俺にこんな化け物2人を操ることなんかできるのかねえ…」

ま、なるようになるでしょ。

霊夢も早苗もそれといって仕事しているところはあまり見ないし。

やっているといえばたま〜に来るお祓いの依頼や賽銭管理だけだし。

と神主服で欠伸をしながら縁側に座る。そして立てかけられた大幣をなんとなく握る。

特にこれといった理由はなく、ただ単に握っただけだ。

「近接武器に使えるよな…これ。仕込み刀とかあるのかね？」

ペン回しのように大幣を回しながら、再び立てかける。
正直言ってもよかった。

「さて…掃除でもしますか」

何もやることがないと辛い。故に掃除をしよう。
と言うわけで桶と雑巾を持って井戸に向かった。

「よっこら…っと」

腕を振るわせて、桶に水をくむ。

このときに靈力を込めて水をぬるま湯にするのが肝だ。
そうすればしもやけにならず、掃除をした後に床がつめてえぞ力
スが！ってならずにするむ。

「熱すぎたら逆に雑巾が絞れないからなw」

雑巾を絞って守矢神社の狛犬を磨く。

飯にも神に仕える身としては、このどうでもいいように見える狛犬も磨くようにするべき。

というか狛犬自体どうでもよくないからな。うつほ物語でも白銀の犬って言われてだな…

まあどうでもいい。

「ふふん…掃除を素直に出来る人は偉いんだぞ。全く…最近の奴らは掃除をしようとしな…」

「それは部屋を掃除しない私に対するあてつけですか…ケホッ…」

弱々しい声が聞こえた。振り向くと、目をうつろにして冷えピタを貼っている早苗。

ピンク色のパジャマを着てサンダルを履いている。

「おう早苗、体は大丈夫か？」

「鈴仙さんのお薬のおかげで、一応歩けるようにはなりました…」

「ふむ……」

早苗に近づいてまじまじと見つめる。

んでもって頬に手を当てて、熱を確認する。

「…冷たい…」

「お前が熱すぎるんだよ、あゝまだ37度くらいだ。今日も休んだほうが身のためだぞえ？」

「いいんですか…？大学生さんだけに任せるのは…」

「アホ、それでお前が無茶してぶっ倒れてもらっちゃ俺の仕事が増えるんだよ。休め休め」

ぶっっちゃけ早苗がぶっ倒れちゃ何か寂しい。

というより愉快的な早苗がここまで弱っちゃ、こっちも調子がくる

うっての。

「じゃあ…お言葉に甘えます。御免なさい」

「いいってもんよ。これも鍛錬なのである。貴様は休んでおれ」

早苗が自分の社務所…あーもうめんどくさい、家でいいや。家に戻った。

俺はそれを見届けてからもう一度掃除を再開する。

あれ？しめ縄がほつれてる。結びなおさないと。

「えっと…藁の編み方は…見よう見まねだが大丈夫かな…こうしてこうして…しめしめつと…」

あ、ほどけた。もういっちょ…しめ縄しめしめつと…よしできた」

ふむ…我ながらいい出来だ。

あとはしめ縄をもとあった場所に戻す。

「ふうつと、神社は広いねえ…高校の時の掃除時間とは大違いだ」

高校の掃除は教室を箒で掃くだけでハイ終了。

だったが、神社はそうは行かない。

枯葉は集めて固めて置いておく。

他にも狛犬、手水舎、賽銭箱、鳥居一（飛んで磨く）など

ほとんど人の目が着く場所は掃除することになる。

これを週一に早苗はこなしているのだ。

「あいつの苦勞が分かるねえ…俺も今度手伝おう」

家に戻って飯の準備をすることにした。

ちなみに飯は普段からの俺の仕事だ。

米を洗い、釜に入れて水を入れる。

この水はろ過された綺麗な水だ。品質は俺が保証する。
弱アルカリ性の硬度の高い水。体にいい水だぞ。

「始めチヨロチヨロ後パツパ。つとな」

次は豆腐だ。早苗の奴は以外にも豆腐の冷やつこが好きらしい。
低カロリーやらなんやらで進めてくるが、人妖にカロリーもクソもあるか。

まあ早苗用に一個作ってやるか。

つたく、んで？後は消化にいいおかゆでも作ってやるか。

…ん？おかゆってどうやって作るんだ？

まあ簡単に言えばあれだ、ドベドベ飯。つまり水を増やせば出来るのか。

「だが流石に味のないおかゆをはいどうぞで食えるわけないな…」

仕方ない。おじやにしてやろう。

まずは適当にダシをとって………こういうときは粉末だしとかがあれば簡単なんだけどなあ。

んで、その間ににんじんと大根としいたけを…小さくきるつとな。

で、まず土鍋にさっきつたにんじんと大根投入。水を入れて煮る。

煮だつたらしいたけ投入。お？おかゆが出来た。まあ最後に入れよう。

今入れたらドベドベ飯どころか液体化しちまう。

「しょうゆ…た…ま…ご…つと」

若干白身があつたぼうが色合いたにもいい。

そしてこれを、どんぶりに移して、おかゆを投入。
最後にスプーンで混ぜたらできあがりつと。

「ふむ…ダシの味が薄かつたかな…まあ仕方ない」

後は体の温まる味噌汁を3人分。飯を炊いて適当なおかずを作れば飯は完成だ。

「早苗…起きてるか？」

「あ、どうぞ」

襖を開けて、飯と薬が入った盆を早苗の枕元に置く。

「おこしちまったか？まあそれはそうと、飯だ。消化にいい物を作ったからな」

「器用なんですね」

「何を言う、大学生たるものの飯を作れなくては自立は出来ん」

「でも、寝癖は治ってませんよ？」

「寝癖は気合で直すものだ。女には分かんだらうがな。ほれ、体起こすぞ」

早苗の体をやさしく起こす。

病人をいたわる位のやさしさは必要だ。だがDQNは死ね。風邪

こじらせて死ね。

AQNは重宝すべき存在だが。

「本当に何から何まで御免なさい。この借りは一生かけて返します」

「いや…ほとんど不老不死なんだけど俺…」

「私も一応現人神ですから」

「じゃあほんとに死なないじゃん」

「分かりませんよ？……おいしそうなおじやですね」

「さあ食え、俺の自信作だ。麻薬成分があるほど美味いぞ」

「やっぱり食べるのやめます」

嫌々食べた早苗だが、結構おいしかったそうか、目を丸くした。

「おいしい…」

「綾波を意識したのか？今の台詞」

「純粹においしいんですよ。お母さんの味ですね」

「お前の母親は麻薬を作ってたのあじじじじじじ…」

熱々のどんぶりを目玉に押し付けられた。

「冗談も通じないのかこいつは。」

20・看病する際は衛生上に注意し、消化にいい食べ物を渡しましょう（後書き）

こぼれ話

うどんげ「貴方は誰？」

ゲンドウ「ゲンドウだ」

うどんげ「……ふざけないで」

ゲンドウ「ふざけてなどいない」

ゲンドウうどんげ。回文だぞ。

感想欄で知った。

21・自らを変える事によって新しい発見があるかもしれません

「うおおあああああああ！！！！??」

「大君！まってよ！」

俺は今何をしているかって？

そうだよ、フランから逃げてるんだよ。

いきなり弾幕ごっこをしようだとさ。

確かに俺もそれには同意した。

だがこないだの死闘と比べて段違いに弾幕が濃い。

と言うより確実に俺を殺しにかかっている。

「ちよっ！タンマ！！タンマ！！！！やめろ！！死ぬ！！！！殺される！！！！」

「大丈夫だよ、ちよつと痛いだけだから」

「お前は医者か！！あるいはドクターか！！UNオーエンは彼女か！！！！」

半泣きになりながら全力疾走でフランの部屋を飛び、転がり、走る。

「やっぱりすばしっこいと面白いよね！」

「俺は悲しい！！怖い！！死ぬぎゃあああああああああああ
あ！！！！！！フゲッ！」

背中が爆発して地面に叩きつけられた。

さて、今俺は何でこうなったか、簡単に説明しよう。

1 ・早苗が風邪から復帰し、いつも通りの生活に戻った。

←

2 ・さて、今日ものんびり過ごそうか。

←

3 ・ん？手紙だ。紅魔館から？何々…

←

4 ・ふむふむ…フ란の世話をちょっと頼む…とな？お安い御用だ。

←

5 ・フ란「弾幕ごっこしようよ！」俺「そういえばやるのは久々だな、やろうか」

6・ボコボコ。普通の人間ならシリアスモードで死んだ。

と言うわけだ。早苗は張り切って人里に信仰活動に向かっている。病み上がりだから無茶するなよ〜と、一応釘は刺した。まあそんなこと、早苗が聞くはずがない。と言うか…奇跡で風邪くらい治せよ。

「…大丈夫？」

フランが見よう見まねで俺に消毒液を塗る。
ほっと思ったら普通に再生するがフランが直してあげると言うから

治療してもらっている。

まあこれも一部の情緒安定と言っわけさ。人を思いやることで成長する。

ってスクールカウンセラーのプリントに書いてあった。

「大丈夫だ。問題ない」

「でも…怪我しちゃったよ？」

心臓を握りつぶしたお前が言う台詞じゃないと思うが。

「そうやってフランが俺を治してくれるだけでも俺は幸せもんだ（遠い目）」

「…何かあったの？」

「いや、夢に見た瞬間だから若干感動している」

フランと仲良くなること、それは…まああれだ。

その手の道を行くものなら誰もが夢見る瞬間だろう。

と、涙ぐんだ瞬間、突き刺さるような激痛が背中を襲った。

「あだだだだあああああああ！！！！？？？」

「わあ！？大丈夫！？」

涙ぐんだ涙を数十倍の量を流しながらフランの手を見る。
血がついてる…ってお前まさか…

「傷口ほじくった？」

「…うん」

「マジヤメテ、シヌ」

ちくせう。俺の再生能力だって無限じゃないんだぞう。

フランと遊んで数時間はたっただろう。

俺にもよく分らん。なんせここにや時計がない。
時計があつたとしても俺は見ない。
なぜかって？ 知らん。

「はあ……疲れた…死にたい」
「駄目！」

「冗談だよ」大学生君、ちょっといいかしら「お？ 咲夜さん。どうしたのかね？」

フランの頭を軽くなでて、咲夜さんのところに行く。

咲夜さんは俺が来たのを確認すると、フランの部屋の扉を閉め、
いつの間にか外に来ていた。これが能力か。すごいな。

庭で美鈴さんが聞き耳を立てているがあえて気にしないことにしよう。

「妹様の件で、少し話が…いいえ、すこしアドバイスをいただきました
いの」

「ほえ？」

フランの件か。まあ咲夜さんが言う分だから結構なことなんだろう。

と言うか咲夜さん…来客を数時間放置つてのもどうよ。水でも茶でも菓子でも出してくれたらうれしいのだが…

「アドバイス？…まあ今後あんたもフランとの付き合いも多くなるだろうしな…いいけど」

俺の知っていることは、フランの血肉以外の好物、主に好きな趣味。

好む服装などなどだ。性格はまあ温厚。

「…お願い。メイドとして何か役に立てることが…」待ちな咲夜さん「…？」

だーめだだめだ。貴様はフランの気持ちをつかていない。

「ええか？フランはお堅い態度が嫌いなんだ。こないだフランに聞いてみたんだが

咲夜の態度は堅すぎて気に入らない。と言っている。それにフランはレミリアとは違う。

同じ吸血鬼だからといって身分にこだわるような奴ではないし、カリスマもない。

その辺をよく考えてみる」

俺の言う台詞にメモを取りながら咲夜さんは聞く。

俺は先生ではないぞ。

「つまり…妹様「ん？」…フレンドール様「なんだって？」…フランはどうして欲しいの？」

少し考えて、俺は再び口を開く。

「とりあえず姉妹で敬語とタメ口を使い分けてみたらどうだ？」

「そ…そんな器用な事…！」

「まあ今出来なくても、少しずつ努力してみろ。」

あ、もしレミリアにタメ口の事がばれたら、俺の命令だと伝えとけ。

宣誓書を書いたら本当だって分かるだろ？」

さらさらっと紙に宣誓書を書く。

「ホレ、じゃっ俺はそろそろ帰るぞ、フランによろしく」

「ええ…ありがとう…」

「あと、最後に一言」

ぴくっと、浮かんでいる俺を見上げる咲夜。

「さっきのアドバイス、半分以上は適当に言った」

「帰れ！！！！」

ナイフがたくさん飛んできた。

時を止めて回収するそうだが……なら投げるなよといいたくなる。
と言うわけで一本拝借することにした。

その後、咲夜はフランに思い切った態度を取り、見事フランの心を掴んだという。

このことは文文。新聞にも取り上げられた。

「えーっと…何々…悪魔の妹、495年ぶりに外に出る…マジかよ…」

次の日

「朝起きた場所場所が旧灼熱地獄か…ついてない…」

辺りが業火に包まれて、見渡す限り火の海
何で俺はこうなったのか、朝起きたらここにいたんだ畜生。
見当はつく。BBAめ…

「やれやれ…暑いのは苦手だつての…」

『久々の人間さんだ』

「我を呼ぶのは何者か（神奈子風）」

灼熱地獄に住む地獄鴉…だっけ？れいつつぽ靈鳥路空。

あなた誰？と、手に持ったバスターっぽい奴を頭に当てて首をか
しげる。

「地上から来たって感じの服着てるね」

「いずれにせよ、俺は自ら望んでくるほどMではない。返して頂け
ないか？」

「でも、最近神を食べたから、その力を試したいんだけど…」

紫…お前まさか、異変が起こる前の下準備じゃないだろうな…
でも、こいつを倒せば返してくれるんだろ？

逃げるか倒すか…逃げたところで灼熱地獄のど真ん中…逃げられ
ない。

「空、俺は腹が減ってるんだ」

「私もおなか減った。だからあなたを焼いて食べる」

うにゅー！とぴょんぴょん跳ねる空。

コイツは相当な聞かん坊だな。

「なるほど…引く要素はないってか」

「っ！？…すごい霊気と妖気……」

互いに身構え、戦闘態勢に入る。

「使用カードは3枚、いいな？」

「もちろん」

これ…負けるんじゃないのか？

21・自らを変える事によって新しい発見があるかもしれません（後書き）

こぼれ話

ちよつとしたキャラ説明。

守矢神社に住まう浮浪人

大学生（D a i - g a k u s e i）

職業 無職

能力 不明 *1

住んでいる場所 守矢神社 *2

種族 人妖

人間友好度 高

風神録異変の最中に突然現れた人妖。

特に誰を襲うわけでもなく*3 守矢神社に飛んでいった、いわゆる
浮浪者。

幻想郷に来てからもこれといった予定もなく、今日も幻想郷を飛び
回っている。

その割には他者との交流もしっかりしているそうだ。

人里にて上白沢慧音の寺子屋で子供たちの世話をしたり

博麗神社に遊びに行ったりと、行動範囲は広い*4

しかしその実力は博麗霊夢を下す程であり、
本気で怒ったことはないが、
本気で怒ると山は吹き飛ぶだろうといわれている。

余談だが姑息な手を使うこともしばしばあるそうだ。

性格

大学生という名だけあって、基礎以上の学力を持っているそうだ。
しかし精神年齢が余りにも幼すぎるため、結果的に宝の持ち腐れとなる。

妙なところで頭が働き、妙なところで実力を発揮する。

ちなみに料理は上手だが、主に投げるそうだ*5

能力

不明である。幻想郷の賢者曰く人が誰もが持つものが増幅している
そうだ。

疑惑

外の世界の人物、『碇シンジ』*6という人物に憑依していた説がある。

その噂の発端は『霧雨魔理沙』だが、彼女も行方不明なった記録がある。

彼女曰く、碇シンジとは交友関係があり、友人関係になったそうだし、しかし噂は噂。信じるか信じないかは自由である

*1 複数持っているのかどうかは不明である

*2 居候しているそうだ

*3 フラフラと現れ、目的がないような顔をしている。 実際私も見た。

*4 この幻想郷縁起を書くのを手伝うこともある。

*5 味噌汁であろうが揚げ物であろうが、本当に投げる。

*6 「えヴぁんげりおん」というロボットの操縦士らしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8321w/>

目が覚めたら東方世界にいた

2011年10月11日01時55分発行